

岩押Ⅲ遺跡

— 平安時代の水田、江戸時代の畑の調査 —

(都)3.3.8 高崎駅東口線社会資本整備総合交付金(活力基盤)
事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2011

群馬県高崎土木事務所
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

岩
押
Ⅲ
遺
跡

— 平安時代の水田、
江戸時代の畑の調査 —

(都)3.3.8 高崎駅東口線社会資本整備総合交付金
(活力基盤)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇一

群馬県
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



岩押Ⅲ遺跡

— 平安時代の水田、江戸時代の畑の調査 —

(都) 3.3.8 高崎駅東口線社会資本整備総合交付金 (活力基盤)
事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2011

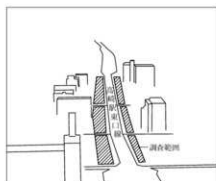
群馬県高崎土木事務所
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



▲ 高崎駅東口線と遺跡（西から、上方が玉村町方面）

近代的なビルが建ち並ぶＪＲ高崎駅東口線の周辺は、今やその地形や遺跡の状況を伺い知ることが難しい。しかし、このビルの狭間には微高地と低地が交錯し、江戸時代には畑が、また平安時代には水田が広い範囲に営まれ、現在とは対照的にのどかな田園地帯を形成していた。

高崎駅東口線の道路整備に伴う一連の事業は、市街化が進んだこの周辺地域において、東西の延長が約600mにも及ぶ貴重な発掘調査の機会を提供したのである。





▲第1面(浅間A軽石混土層下面)畑復旧溝 (1区, 東から, 写真上方が高崎駅東口) ▶

江戸時代後期の天明三年(1783)、浅間山の噴火に伴う火山灰(浅間A軽石)はこの周辺に10cmの厚さで降り積もった。遺構はこの火山灰を除去するために溝や土坑を掘削し、ここに火山灰を捨て、おそらく当初掘削した土壌をこの上位に被覆した天地返し(跡)と考えられ、底面には鏝状の工具による掘削痕が明確に残る。特に復旧溝の場合、浅間A軽石の降下以降にこの軽石を踏み込んで行われた、畑耕作に伴う耕作痕との区別が難しい。



▼第2面(浅間B軽石層下面)水田 桑里大畦 (7区, 西から, 写真上方が環状線方面)

天明元年(1108)の浅間B軽石で埋没し、あたかも高崎駅東口線に沿うかのようなこの畦は、幅2mで地形を無視してほぼ東西方向に走行し、周囲の景観のなかに異彩を放つ。この畦は桑里制に基づいて、1町間隔で配置された坪境の畦であるとの結論に至ったが(27頁参照)、南北方向が狭い調査範囲のなかでの発見は幸運としか言いようがない。





▲第1面（浅間A軽石土層下面）掘復旧土坑と耕作痕（7区、東から、写真上方が高崎駅東口、8・10頁参照）

天明三年（1783）に降下した浅間A軽石（As-A）を除去した復旧土坑（写真左下部の底面が白い土坑）の上位に、これに平行して故替えした2時間の畝間の痕跡が重複する。南端部（写真左）と東端部（写真下）には、耕作の及ばない何らかの境界が明確に見られる。

▼第2面（浅間B軽石層下面）水田 条里大畦（7区、東から、写真上方が高崎駅東口、15頁参照）

天仁元年（1108）の浅間B軽石で埋没したこの条里大畦は、高崎駅東口線にほぼ平行して東西方向に走行する。しかし、高崎駅東口線の走行が東西方向よりやや南側に傾いていることから両者の走行は平行しない。したがって、この大畦を確認し得たのはこの写真の7区から東側の12区にかけて、長さ約120mの間に限られる。





▲第2面（浅間B軽石層下面）水田 条里大畦（38区、東から、写真上方が高崎駅東口）
幅2mの南北方向の条里大畦。この西側（写真上方）109mの地点（35区）に同様な大畦が存在。



▲土層断面（29区、東から）



▲第2面（浅間B軽石層下面）水田 条里大畦（10区、東から、写真上方が高崎駅東口）
東西方向の条里大畦は微高地に突きあたって一旦途切れるが、この微高地の向こう側にこの延長線上の大畦が存在する。つまり、条里区画は微高地を跨いで連続している。



▲浅間B軽石
降下ユニット
土層断面

浅間B軽石降下
ユニット（初期
軽石、平面） ▶



▲浅間B軽石

下位から灰色細粒火山灰、黄褐色軽石、粗粒スコリアの複数のユニットが辨識。



▲第2面（浅間B軽石層下面）水田 条里大畦土層断面（7区、西から、15頁・付図1参照）

序

高崎市と茨城県鉾田市を結ぶ国道354号線は、県内では高崎市街地と東毛地域をつなぐ主要な幹線道路のひとつです。近年、周辺地域における人口の増加に伴う交通量の増加から、そのバイパスとして東毛広域幹線道路の整備が進められています。一方、高崎駅東口線の周辺地域は、市街化が進んで商業地域の中核地域となりつつあり、J R 高崎駅へのアクセスも含めてその基盤整備が急がれるところであります。(都)3.3.8高崎駅東口線社会資本整備総合交付金(活力基盤)事業は、東毛広域幹線道路の一環として、このような市街地発展の要請を背景に計画されたものです。

岩押Ⅲ遺跡は、この高崎駅東口線街路整備事業に伴って、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が平成21年度から22年度にかけて発掘調査を実施した遺跡です。この遺跡では主として江戸時代の畑と、平安時代の水田を検出しました。なかでも、天仁元年(1108)の浅間B 軽石層で埋没した平安時代の水田については、一部で確認した大畦が条里制に基づいて規格的に配置された坪境の畦である可能性が高く、これはこの周辺地域における初めての発見例として、特筆される重要な資料を提供したと言えます。

本遺跡の発掘調査から報告書の刊行に至るまで、群馬県高崎土木事務所、群馬県教育委員会、高崎市教育委員会、高崎市都市整備部、地元関係者の方々から格別のご指導とご高配を賜りました。今回、報告書を上梓するに際し、これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、併せて本報告書が群馬県の歴史を解明する上で、広く活用されることを願い序といたします。

平成23年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 須 田 栄 一

例 言

- 1 本書は、平成22年度(都)3.3.8高崎駅東口線社会資本整備総合交付金(活力基盤)事業に伴う、岩押Ⅲ遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡所在地 群馬県高崎市岩押町・上中居町
- 3 事業主体 群馬県西部県民局 高崎土木事務所
- 4 調査主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 調査期間 平成21年4月1日～平成21年6月30日(平成21年度第一次)
平成22年1月1日～平成22年3月31日(平成21年度第二次)
平成22年4月1日～平成22年5月31日(平成22年度)
- 6 調査体制 平成21年度第一次 主任専門員(総括) 坂口 一・主任調査研究員 平井 敦
平成21年度第二次 主任専門員(総括) 坂口 一・主任調査研究員 斎藤 聡
平成22年度 主任専門員(総括) 坂口 一・上席専門員 麻生敏隆
遺跡掘削工事請負 平成21・22年度 株式会社シン技術コンサル
委託 地上測量 平成21年度：アコン測量設計株式会社、平成22年度：株式会社調研
航空測量・空中写真撮影 平成21・22年度：株式会社シン技術コンサル
- 7 整理期間 平成22年11月1日～平成23年3月31日(平成22年度)
- 8 整理解体制
整理担当者：坂口 一(主任専門員(総括)) 保存処理：関邦一(補佐) 遺物写真撮影：佐藤元彦(補佐)
遺物観察(土師器・須恵器)：神谷佳明(上席専門員) 遺物観察(陶磁器)：大西雅広(主席専門員)
- 9 本書作成の担当者は次のとおりである。
編集・執筆 坂口 一(主任専門員(総括))
- 10 出土遺物と記録資料の一切は、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 11 本書の作成にあたっては次の方々には有益な指導と助言を賜った。記して感謝の意を表す次第である。
黒田 晃(高崎市教育委員会) 小林博昭(岡山理科大学) 須永光一(太田市教育委員会) 田口一郎
(高崎市教育委員会) 田口正美(高崎市総務部庶務課市史資料担当) 中島直樹(玉村町教育委員会)
右島和夫(専修大学) 高崎市教育委員会 群馬県教育委員会 高崎タワー21管理組合(敬称略)

凡 例

- 1 調査区域には、国家座標の日本平面直角座標第IX系(世界測地系)に基づいて5m間隔のグリッドを設定し、X軸、Y軸の数値を付図に示した。
- 2 遺構図中の北は国家座標における座標北(方眼北)を示す。また、遺跡の中央部における真北との偏差(真北方向角)は $-0^{\circ} 28' 49''$ ($N-0^{\circ} 28' 49''-E$)である。
- 3 遺構の方位は、座標北からの主軸の傾きを示す。
- 4 遺物観察表の記載方法は次のとおりである。
 - (1) 胎土中の砂粒の大きさによる分類は、土壌物理研究会による基準に従い、細砂粒($<0.5\text{mm}$)、粗砂粒($0.5\sim 2.0\text{mm}$)、細礫($2.0\sim 5.0\text{mm}$)、中礫($5.0\text{mm}>$)とした。
 - (2) 色調は農林省水産技術会議事務局監修、(財)日本色彩研究所色標監修の新版標準土色帖に従った。
- 5 本文中で使用したテフラ記号の名称は以下の通りである。
浅間A軽石(As-A)……………1783(天明三年) 浅間B軽石(As-B)……………1108(天仁元年)
浅間C軽石(As-C)……………3世紀後半 浅間板鼻黄色軽石(As-Y P)……………1.3～1.4万(y,B,P)

目 次

口絵	2	第2面(浅間B軽石・B混土層下面).....	13
序	(1)	概要.....	13
例言	(2)	水田.....	14
凡例	(3)	溝.....	24
遺構一覧表	(4)	遺構外出土遺物.....	26
I 発掘調査と遺跡の概要.....	1	III 遺物観察表.....	26
1 調査に至る経緯と経過.....	1	IV 調査の総括.....	27
2 調査の方法.....	1	浅間B軽石層下水田と条里地割.....	27
3 遺跡の位置と地形.....	2	V 自然科学分析.....	31
4 周辺の遺跡.....	4	写真図版	
5 遺跡の基本層序.....	6	報告書抄録	
II 発見された遺構と遺物.....	7	付 図	
1 第1面(浅間A軽石混土層下面).....	7	付図1：岩押Ⅲ遺跡 第1・2面 遺構平・断面図(1)	
(1) 概要.....	7	付図2：岩押Ⅲ遺跡 第1・2面 遺構平・断面図(2)	
(2) 復旧土坑.....	8	付図3：岩押Ⅲ遺跡 第1・2面 遺構平・断面図(3)	
(3) 復旧溝・耕作痕.....	10	付図4：岩押Ⅲ遺跡 第1・2面 全体図(1/1,000)	

遺 構 一 覧 表

※全遺構は「付図1～3 遺構平・断面図」参照

地区	面	種類	掲載頁			地区	面	種類	掲載頁			地区	面	種類	掲載頁		
			本文	図	写真				本文	図	写真				本文	図	写真
5	1	復旧土坑1～3	8	8	4	8・9	2	浅間B下水田	15	29・30	6・7	38	2	浅間B下水田	19	53	18
7	1	復旧土坑1～11	8	10	5	10	2	浅間B下水田	15	31	7	39	2	浅間B下水田	19	54	18
14	1	復旧土坑・2	8	11	8	11	2	浅間B下水田	15	32	7	40	2	浅間B下水田	19	55	19
34	1	復旧土坑・2	9	9	16	12	2	浅間B下水田	16	33	8	41・42	2	浅間B下水田	19	56・57	19・20
1	1	復旧溝・耕作痕	10	12	2	13	2	浅間B下水田	16	34	8	43	2	浅間B下水田	19	58	20
5	1	復旧溝・耕作痕	10	13	4	14	2	浅間B下水田	16	35	9	1	2	1号溝	24	59	
6	1	復旧溝・耕作痕	10	15	5	15・16	2	浅間B下水田	16	36・37	9	1	2	2号溝	24	60	2
7	1	復旧溝・耕作痕	10	16	5	18・19	2	浅間B下水田	16	38・39	10	1	2	3号溝	24	60	2
8	1	復旧溝・耕作痕	10	14	6	20	2	浅間B下水田	16	62	10	3	2	4号溝	24	61	3
9	1	復旧溝・耕作痕	11	17	6	21	2	浅間B下水田	17	40	11	3	2	5号溝	24	61	3
29	1	復旧溝・耕作痕	11	18	13	24	2	浅間B下水田	17	63	11・12	3	2	6号溝	24	61	3
30	1	復旧溝・耕作痕	11	19	14	25	2	浅間B下水田	17	64	12・20	3	2	7号溝	24	61	3
31	1	復旧溝・耕作痕	11	20	14・20	26・27	2	浅間B下水田	17	41・42	12・13	20	2	9号溝	24	62	10
32	1	復旧溝・耕作痕	11	21	15	28	2	浅間B下水田	17	43	13	21	2	10号溝	24	65	11
33	1	復旧溝・耕作痕	11	22	15	29～31	2	浅間B下水田	17	44～46	13・14	24	2	11号溝	24	63	11・12
4	2	浅間B下水田	14	24	2・3	32・33	2	浅間B下水田	18	47・48	15	25	2	12号溝	24	64	12
4	2	浅間B下水田	14	26	4	34	2	浅間B下水田	18	50	16	25	2	13号溝	24	64	12
5	2	浅間B下水田	14	27	4・5	35	2	浅間B下水田	18	49	16・17	25	2	14号溝	24	64	12
6	2	浅間B下水田	14	25	5	36	2	浅間B下水田	18	51	17	43	2	17号溝	24	66	20
7	2	浅間B下水田	15	28	6・20	37	2	浅間B下水田	18	52	17・18						

I 発掘調査と遺跡の概要

1 調査に至る経緯と経過

(都)3.3.8高崎駅東口線社会資本整備総合交付金(活力基盤)事業は東毛広域幹線道路の一環で、高崎市街地と東毛地域をつなぐ主要な幹線道路として計画された。

事業予定地について、平成20年8月、平成21年3月、平成21年6月の群馬県教育委員会文化財保護課による試掘調査及び立合い調査が、一歩本調査と平行して行われた。この結果に基づいて、同課と群馬県西部県民局高崎土木事務所との協議がその都度行われ、この協議に基づいて平成21年4月～同年6月(平成21年度第一次)、平成22年1月～同年3月(平成21年度第二次)、平成22年4月～同年5月(平成22年度)にかけて、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を実施した。

なお、調査対象地に接する民家、店舗、営業所等の出入りの利便及び歩行者等の通行の安全を考慮して、調査区域を合計で42区画に分割して発掘調査を実施した。また、これらの出入り口を確保するため、一部には調査が不可能であった部分も存在する(図1)。

2 調査の方法

調査対象地のほぼ全ての部分にはアスファルト舗装が施されて、駐車場などに利用されていた。このため、アスファルトを除去し、さらにその下の採石を除去して調査を行った。また、歩行者等の通行の安全を考慮して、全ての調査区に安全柵を設置して調査を実施した。

調査区域内には、天明三年(1783)に降下した浅間A軽石(As-A)を動き込む、浅間A軽石降下以降の畑作に伴う畝間の痕跡が存在した。また、その下位には天仁元年(1108)に降下した浅間B軽石(As-B)が、層厚10cmで調査対象地のほぼ全域に堆積していた(基本土層図6頁参照)。また、県文化財保護課による試掘調査において、浅間B軽石層直下の黒色粘質土は、水田耕作土である可能性が指摘されていた。

これらのことから、この遺跡は①浅間A軽石を含む土壌(A軽石混土)の下面、②浅間B軽石層下面の2面を調査面として設定し、それぞれの調査面より上位は大規模掘削機(バックホー)によって除去した。

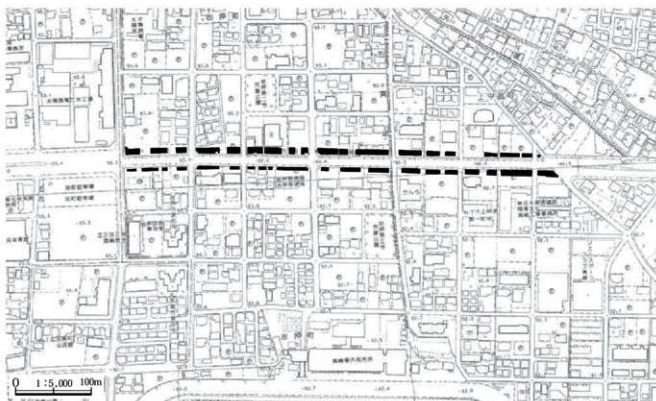


図1 発掘調査区域図 (S=1:5,000, 高崎市都市計画図に加筆)



図2 遺跡の位置図1 (S=1:20万, 国土地理院 地勢図「長野」・「宇都宮」)

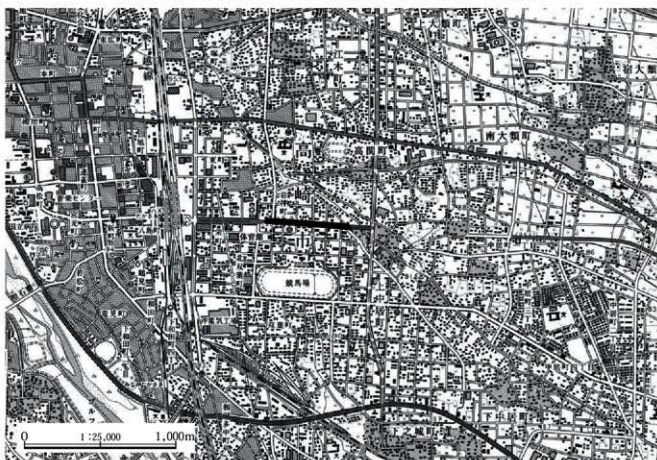


図3 遺跡の位置図2 (S=1:25,000, 国土地理院 地形図「高崎」)

3 遺跡の位置と地形

岩押Ⅲ遺跡は高崎市岩押町・上中居町に所在し、JR高崎駅の東口を起点とする高崎駅東口線(東毛広域幹線道路の一部)の事業予定地で、駅の東側約500m～1.1kmの間に位置する(図2)。調査範囲は現在の高崎駅東口線に沿った両側の拡幅部分で、南北の幅5～10m、東西の延長は約600mである(図1)。

この遺跡が立地する高崎市は群馬県の南部に位置し、大きくは関東平野の北西端部にあたる。群馬県の中央部には、最高峰の標高が1,449mの榛名山が利根川を挟んで赤城山と対峙している。榛名山の南東麓には相馬ヶ原扇状地と呼ばれる火山性の扇状地が広がるが、この扇状地に北西部で接し、西縁の烏川から東縁の広瀬川にかけては前橋台地と呼ばれる平坦地である。この前橋台地は大規模な山体崩壊による前橋泥流がその基盤を構成し、台地内には現井野川の流域に段丘と谷底平野で構成される幅約15kmほどの井野川低地帯と呼ばれる低地帯が、北西から南東の方向に形成されている。この井野川低地帯を境に西側は、特に高崎台地と呼ばれている(図4)。

高崎台地上には、その基盤である前橋泥流堆積物の上位に高崎泥流と呼ばれる泥流が堆積し、井野川低地帯の高位段丘には高崎台地と同様に高崎泥流が堆積しているとともに、その低位段丘には6世紀代の榛名山二ツ岳の噴火に関連した泥流の堆積が認められている。

岩押Ⅲ遺跡は、南東流する烏川と井野川に挟まれた高崎台地上に位置する。この範囲には小河川の旧流路による樹枝状の低湿地が形成されており、このために微高地と低湿地が入り組んだ地形を形成している。遺跡の周辺では宅地化が進んでその微地形を伺い知ることは難しいが、大きくは北西から南東の方向に形成された低地部のなかに、狭い微高地が一部に存在する地形を呈する。現地表面の標高は遺跡の西端部、東端部ともに約93mでほぼ平坦であるが、浅間B軽石層直下においては西端部が約92.5m、中央部(10区付近)が約92.2m、東端部が91.7mで、大きくは西側から東側への僅かな傾斜地形を示すが、中央部に微高地が存在し、東端部から東側は微高地の縁辺部に接続する僅かな登り傾斜に転ずる(6頁図6)。

引用文献

早田 勉 2003 「前橋台地と広瀬川低地帯の地形分類図」『新編高崎市史』通史編1 高崎市

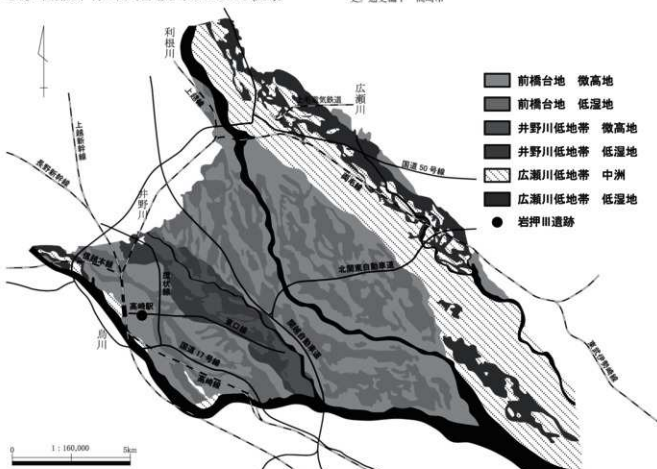


図4 前橋台地の地形分類図 (S=1:16万, 早田2003より)

4 周辺の遺跡

この遺跡の周辺では、開発行為などに伴って数多くの遺跡が発掘調査されている。ここでは縄文時代～平安時代・近世の遺跡を概観するが、旧石器時代については、烏川から井野川にかけてのこの周辺地域に約1万年前と推定されている層厚数mの高崎泥流が堆積していることから(新井他1993)、周辺における発見例は皆無である。

縄文時代では、この遺跡が立地する高崎台地上においては前期から後期にかけての土器や石器の出土例は認められるものの、遺構として確認できる遺跡の分布は極めて少ない。本遺跡の東側にはほぼ隣接する上中居遺跡群(24)では、前期後半及び中期中葉～後期中葉の多量の土器や石器が出土しているが、住居として確認できるものは皆無で、遺構の多くは主として集石遺構である。

弥生時代になると縄文時代とは対照的に、主として中期後半以降に前橋・高崎台地上では多くの遺跡の分布がみられるようになる。特に、昭和初期に本遺跡の南西約2kmに位置する高崎市竜見町(位置図外)で発見された土器群は、竜見町式土器として群馬県下における中期後半の標識となっており、その象徴的な存在の遺跡である。この他に本遺跡の南側400mの高崎競馬場遺跡(6)、北東約500mの高岡堰村遺跡(12)、東北東約500mの高岡村前遺跡・村前Ⅱ遺跡(13-14)などで、中期後半の集落や墓が確認されている。後期では、本遺跡の西北西1kmの東町Ⅲ・Ⅳ遺跡(44・45)では弥生時代後期と考えられる溝が、東北東約2.5kmの南大類東沖遺跡(35)では、弥生時代後期と考えられる方形周溝墓が確認されている。

古墳時代前期では、本遺跡の東側約1kmの中居町一丁目遺跡(26)と西側に隣接する上中居遺跡群(24)で、集落周辺の遺跡一覧表

№	遺跡名	概要	文献
1	岩押Ⅰ遺跡	平安時代水田、江戸時代畑	本報書
2	岩押町Ⅰ	B下木田、A上木田復旧跡?	「岩押Ⅰ遺跡」高崎市遺跡調査会 1994
3	岩押町Ⅱ	B下木田	「岩押Ⅱ遺跡」高崎市遺跡調査会 1996
4	上中居平塚Ⅰ	B下木田	「上中居平塚Ⅰ遺跡」高崎市遺跡調査会 1996
5	上中居平塚Ⅱ	B下木田	「上中居平塚Ⅱ遺跡」高崎市遺跡調査会 1996
6	高崎競馬場	弥生中期住居	1969年群馬大学調査
7	高岡北沖	B下木田	「高崎市内遺跡埋蔵文化財緊急発掘調査報告書」高崎市教委 1992
8	高岡塚田	B下木田	「高崎市内遺跡埋蔵文化財緊急発掘調査報告書」高崎市教委 1992
9	高岡東沖Ⅱ	B下木田	「高岡東沖Ⅱ遺跡」高崎市遺跡調査会 1996
10	岡久保	B下木田	「岡久保遺跡」高崎市教委 1988
11	高岡東沖・村前	弥生中期住居、古墳住居、奈良水路、中世以降掘立・井戸・水堀	「高岡東沖・村前遺跡」高崎市教委 1995
12	高岡堰村	弥生中期開墾、中・後世開墾屋敷	「高岡堰村遺跡」高崎市教委 1992
13	高岡村前	弥生後期住居・古墳中～後期住居・掘立・後～終末期高、中世掘立・土塚・溝	「高岡村前遺跡」高崎市教委 1992
14	高岡村前Ⅱ	B下木田、中世掘立・井戸・水堀	「高岡村前Ⅱ遺跡・高岡東沖・村前遺跡」高崎市教委 1995
15	上中居早瀬場	中～近世溝・井戸	「上中居早瀬場遺跡」高崎市教委 1992

と墳時代前期の水田が確認されている。中・後期では、本遺跡の南東約1kmに墳丘長133m(推定)で横六式石室と推定されている前方後円墳の越後塚古墳(23)の他、小規模な円墳と考えられる墳墓が散在的に分布する。また、高崎情報団地遺跡(34)では多数の古墳と夥しい数の竪穴住居が確認されている。

奈良・平安時代では集落が高崎台地上に広く分布するようになる。特に平安時代では本遺跡の西北西約1.5kmの真町Ⅰ遺跡(40)・旭町Ⅰ遺跡(41)で、9世紀代の洪水層下から水田が検出されており、これはテフラ層下水田の空白期を埋める意味で特徴的である。また、天仁元年(1108)降下の浅間B軽石層(As-B)下水田は、先述の真町Ⅰ遺跡、旭町Ⅰ遺跡の他、高崎駅東口周辺の東町Ⅰ(42)・Ⅱ(43)・Ⅴ(46)・Ⅵ(47)遺跡、栄町Ⅰ(48)・Ⅱ(49)・Ⅲ(50)遺跡の他、本遺跡に隣接する岩押町Ⅰ(2)・Ⅲ(3)遺跡など広範囲に確認され、この周辺地域のほぼ全域から確認されており、岩押Ⅲ遺跡の周辺は広く水田化されたことを示すが、いずれも調査要因の関係から狭い範囲の調査に留まる。

周辺における近世の発掘資料は少ないが、生産地関係で天明三年(1783)の浅間A軽石(As-A)降下後に復旧した水田が真町Ⅰ遺跡(40)、高崎駅東口周辺の東町Ⅲ(44)・Ⅴ(46)遺跡、栄町Ⅰ(48)・Ⅱ(49)・Ⅲ(50)遺跡などで確認されており、岩押Ⅲ遺跡が畑であることと対照的にこの周辺が水田化されていたことを示す。また、高崎城の城郭遺構は、城域内に位置する高崎城遺跡(位置図外)で多くの遺構・遺物が確認され、真町Ⅰ遺跡では城下町の東端部を南北に画す「遺構」の堀が確認されている。

引用文献

新井雅之他 1993 「およそ1万年前に発生した高崎泥流の分布と起源」『日本地質学会第100年学術大会発表要旨』日本地質学会

No.	遺跡名	概要	文献
16	上中田古薬師	B下木田、中世灌漑遺跡	『中田古薬師遺跡』高崎市教委 1989
17	中田古薬師Ⅱ	古墳前期古墳群・不詳住居・水路、中世灌漑遺跡・墓塚	『中田古薬師Ⅱ遺跡』高崎市教委 1992
18	中田古薬師Ⅲ	B下木田	『中田古薬師Ⅲ遺跡』高崎市遺跡調査会 1994
19	中田古薬師Ⅳ	B下木田、A下木田覆土遺跡	『中田古薬師Ⅳ遺跡』高崎市遺跡調査会 1997
20	中田古薬師Ⅴ	B下木田	『中田古薬師Ⅴ遺跡』高崎市遺跡調査会 1998
21	中田古薬師Ⅵ	B下木田	『中田古薬師Ⅵ遺跡』高崎市遺跡調査会 1997
22	中田古薬師Ⅶ	B下木田	『中田古薬師Ⅶ遺跡』高崎市遺跡調査会 1997
23	扇後塚古墳	前方後円墳、規模133.2m(断)、横穴式石室?、現在消滅	『扇後塚古墳』高崎市教委 1999
24	上中田遺跡群	縄文時代集石遺跡、古墳時代集落、方形周溝墓、奈良時代水田、中・近世遺跡	『上中田遺跡群』高崎市教委 2009
25	中田町一丁目(北22号倉)	古墳時代遺跡、平安時代水田	『中田町一丁目遺跡3』県埋文事業団 2010
26	中田町一丁目(南17号倉)	古墳時代遺跡、平安時代集落	『中田町一丁目遺跡2』県埋文事業団 2007
27	扇塚古墳	古墳時代遺跡	『新編高崎市史』資料編1 高崎市 1999
28	志ノ原古墳	縄文・古墳時代集落、奈良・平安時代集落・水田、中世井戸溝	『中田古薬師遺跡Ⅱ』高崎市教委 1996
29	下芝塚古墳	古墳時代遺跡、奈良・平安時代集落・水田	『下芝塚古墳群の調査』県埋文事業団 1981
30	東崎南大塚	古墳時代遺跡、奈良・平安時代集落・水田	『東崎遺跡群』南大塚遺跡群「高崎市教委 1993
32	東崎西浦・吹手西	古墳時代遺跡、奈良・平安時代集落	『西浦・吹手西遺跡』高崎市教委 1991・『西浦・車入吹手西遺跡』高崎市教委 1992
33	天子前	古墳・奈良・平安時代水田・水路	『天子前遺跡』高崎市教委 1987
34	高崎情報団地	縄文時代集落、弥生時代集落、方形周溝墓、古墳時代墳墓・集落、奈良・平安時代水田、独立柱建物、中・近世溝	『高崎情報団地遺跡』高崎市遺跡調査会 1997・『高崎情報団地遺跡Ⅱ』高崎市遺跡調査会 2002
35	南大塚東沖	弥生時代方形周溝墓、奈良・平安時代水田	『南大塚東沖・扇塚遺跡』高崎市教委 1997
36	南大塚西溝	古墳・奈良・平安時代水田、平安時代集落	『南大塚東沖・扇塚遺跡』高崎市教委 1997
37	東崎井間池	古墳時代土井、中世溝・井戸	『東崎井間池遺跡』高崎市遺跡調査会 1990
38	下杉井	奈良・平安時代水田、中世溝	『下杉井・砂沼遺跡』高崎市教委 1986
39	江木溝跡西	古墳時代遺跡、B下木田、近世溝	『江木溝西遺跡』高崎市遺跡調査会 1995
40	真野	9世紀水堀下水田、B下木田、A下木田覆土遺跡、近世城下町遺構	『真野』遺跡』高崎市教委 1986
41	東町I	9世紀水堀下水田、B下木田	『市内小規模埋文発掘調査報告』高崎市教委 1996
42	東町II	B下木田	『東町I遺跡』高崎市教委 1989
43	東町III	B下木田	『市内古墳埋文発掘調査報告』高崎市教委 1992
44	東町IV	常世溝、C下木田、FA-PP 2次洪水層下水田、B下水田、A下水田・近世溝	『東町IV遺跡』高崎市教委 1994
45	東町V	弥生土溝、FA-PP 2次洪水層下水田、B下水田、中～近世溝	『東町V遺跡』高崎市教委 1995
46	東町VI	B下水田、A下水田覆土遺跡、近代工場跡	『東町VI遺跡』高崎市教委 1996
47	東町VII	B下水田	『東町VII遺跡』高崎市遺跡調査会 2000
48	栄町I	B下水田、A下水田覆土遺跡	『栄町I遺跡』高崎市遺跡調査会 1998
49	栄町II	B下水田、A下水田覆土遺跡	『栄町II遺跡』高崎市遺跡調査会 1999
50	栄町III	B下水田、A下水田覆土遺跡	『栄町III遺跡』高崎市教委 2003
51	双草町I	古墳後期住居・溝、B下水田、近世溝・数穴状遺構	『双草町I遺跡』高崎市遺跡調査会 1996
52	上芝野塚墓	B下水田、A下水田覆土遺跡	『上芝野塚遺跡』県埋文事業団 2002
53	和田多平	B下水田	『市内古墳埋文発掘調査報告』高崎市教委 1989
54	扇小学校校庭	縄文土層、弥生中～後期住居等	『扇小学校校庭発掘報告』高崎市教委 1973

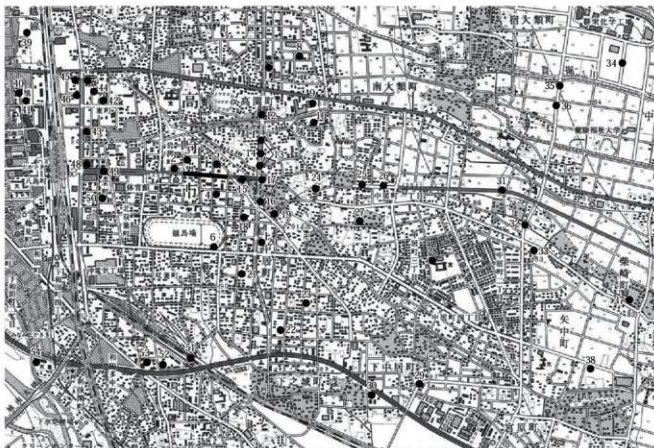


図5 周辺の遺跡位置図 (S=1:25,000, 国土地理院 地形図「高崎」)

5 遺跡の基本層序

岩押Ⅲ遺跡では、調査区域の西半部を中心として、天明三年(1783)に降下した浅間A軽石(As-A)を鋳き込む畑の耕作痕が存在するが、浅間A軽石の一次堆積層は存在しない。また、調査区域のほぼ全域に天仁元年(1108)に降下した浅間B軽石(As-B)が、層厚約10cmの良好な状態で一次堆積している。浅間B軽石は、降下ユニットの全てが残存した部分は皆無であるが、最下層の灰色細粒火山灰、その直上に位置するφ1~10mmの黄褐色軽石及び、その上位に位置する粗粒スコリアの複数のユニットが明確に確認できる(「口絵4」参照)。

また、X層の粘質黒褐色土中にφ1~3mmの白色軽石である浅間C軽石(As-C)を僅かに含み、XI層の高崎泥流堆積物中には浅間板鼻黄色軽石(As-YP)を僅かに含む。

主な調査面は①V層上面と②VII層下面の2面で、調査面①面からは、主として浅間A軽石降下以降の畑の耕作痕及びこれを除去するための土坑を、調査面②面からは浅間B軽石層(As-B)直下の水田をそれぞれ確認した。

- I 盛土。
- II 褐色土。浅間A軽石(As-A)含む。現代の畑か水田の耕作土。
- III 粘質灰黒色土。浅間A軽石(As-A)含む。現代の水田耕作土。
- IV 褐色土。浅間A軽石(As-A)を僅かに含む。
- V 黄褐色土。浅間A軽石(As-A)含む耕作土。一部は浅間A軽石降下以降に転地返しした畑耕作土。
- VI 粘質灰黄褐色土。浅間A軽石(As-A)降下以前の畑耕作土。
- VII 暗褐色土。少量の浅間B軽石(As-B)含む、いわゆる浅間B混土。
- VIII 暗茶褐色土。多量の浅間B軽石(As-B)含む、いわゆる浅間B混土。
- IX 青灰色粗粒火山灰。浅間B軽石(As-B)一次堆積。φ1~3mmの粗粒スコリア。下位に灰色細粒火山灰、φ1~10mmの黄褐色軽石が付く。
- X 粘質灰黒色土。水田耕作土。
- XI 粘質淡灰黒色土。洪水起源の水田耕作土。
- XII 粘質黒褐色土。上位に浅間C軽石(As-C)を含む。
- XIII 黄褐色シルト。高崎泥流堆積物。少量の礫、φ1~5mmの浅間板鼻黄色軽石(As-YP)含む。

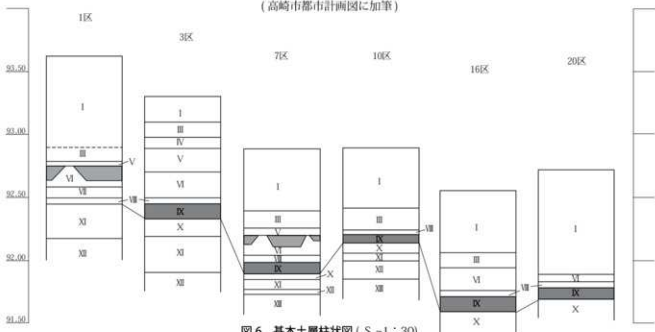
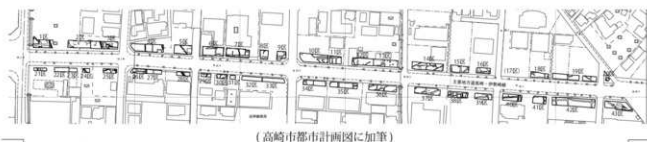


図6 基本土層柱状図 (S=1:30)

II 発見された遺構と遺物

1 第1面(浅間A軽石混土層下面)

(1)概要

調査面の第1面は、天明三年(1783)降下の浅間A軽石(As-A)を含む耕作土(基本土層V層)の下面である。この遺跡では、浅間A軽石の一次堆積層で直接覆われた遺構は存在しないが、噴火で堆積した浅間A軽石を除去するためのいわゆる復旧土坑、復旧溝及び、浅間A軽石の降下以降に行われた畑耕作に伴う耕作痕を、主として調査区域西半部4分の1ほどの範囲で確認した(図7)。調査区域の東半部を中心とした範囲では、この調査面を検出することができなかった。これはこの範囲において、同調査面まで現代の水田耕作が及んでいたことに起因するが、本来この範囲に畑耕作に伴う耕作痕などが存在したか否かを判断する資料はない。

浅間A軽石を除去するために掘削した復旧土坑及び復旧溝は、火山灰の降下後に溝あるいは土坑状の穴を掘削し、ここに堆積した火山灰を集めて捨て、その上位に土坑あるいは溝を掘削した際の火山灰降下以前の耕作土を被せた天地返しの痕跡である。復旧土坑は復旧溝に比較して幅、深さともに規模が大きく、内部は土壌をほとんど含まない浅間A軽石の二次堆積で充填されている(14区)。一方、復旧溝は幅が狭いものと広いものが存在する。深さはいずれも10cmほどで、溝に充填された浅間A軽石の上位には、一部に転地返しによる火山灰降下以前の耕作土が浅間A軽石を覆う状態で認められた。また、一部の復旧溝にはその底面に鎌状の農具による掘削痕が明確に認められた(1区)。なお、復旧溝については後述する畑耕作に伴う耕作痕との区別が難しい。

復旧土坑の上位に、幅25～30cm、深さ5～10cmの畝間の痕跡と考えられる溝を検出した部分があり、耕作痕を被覆する土壌は浅間A軽石の比率が少なく土壌化が進んでいることから(7区)、同様な溝は浅間A軽石の降下以降に火山灰を踏み込んで畑耕作を行った際の畝間の痕跡と判断した。これらを被覆する土壌には、1条置きに土壌化の状況が異なるものが存在することから、これらは耕作過程で畝と畝間を平面的に逆転させる畝替えの痕跡を示すものと考えられる(31区)。

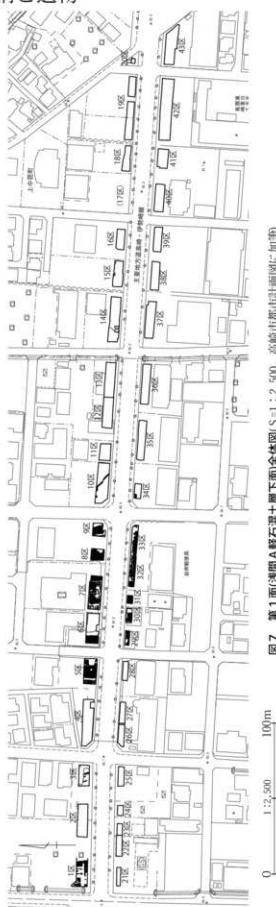


図7 第1面(浅間A軽石混土層下面)全体図(S=1:2,500, 高崎市都市計画図区に加算)

(2) 復旧土坑

5区1号復旧土坑(図8, 写真PL.4)

規模・形状 短軸1.5～2.0m、長軸8.0m以上、深さ10～20cmで、南北に長軸をもつ不整形な長方形。底面全体に緩やかな起伏があり、掘削痕は不明瞭。**充填物** 純層に近い浅間A軽石だが、中央部に浅間A軽石を含む土壌を含む。**遺物** 無し。**重複** 充填物の上位に耕作痕が重複する土層断面の資料を得た。**所見** この遺跡で長軸長が最も長く、隣接する浅間A軽石降下後の耕作痕の走行はこの土坑に沿う。

5区2号復旧土坑(図8, 写真PL.4)

規模・形状 短軸1.1m、長軸1.5m以上、深さ15cmで、南北に長軸をもつ長方形。底面全体に平坦で、掘削痕は不明瞭。**充填物** 純層に近い浅間A軽石で、土壌塊を僅かに含む。**遺物** 無し。**重複** 充填物の上位に、浅間A軽石降下後の耕作痕が重複。

5区3号復旧土坑(図8, 写真PL.4)

規模・形状 短軸1.5m、深さ10cm、長軸は不明だが南北に長軸をもつ長方形と推定。底面全体に平坦で、掘削痕は不明瞭。**充填物** 純層に近い浅間A軽石で、土壌塊を僅かに含む。**遺物** 無し。**重複** 充填物の上位に、浅間A軽石降下後の耕作痕が重複すると推定。

7区1・2・3・4・5・6号復旧土坑(図10, 写真PL.5)

規模・形状 短軸60cm～1.1m、長軸1.4～2.4m、深さ10～20cmで、いずれも南北に長軸をもつ不整形な長方形。底面全体に不整形で断面形は船底状を呈し、掘削痕は不明瞭。**充填物** 純層に近い浅間A軽石で、小さな土壌塊を僅かに含む。**遺物** 無し。**重複** 無し。**所見** それぞれ隣接するが重複がないことから、一連で掘削された可能性が高い。充填物の上位に浅間A軽石廃棄後の耕作痕が重複すると思われるが、削平されて不明。

7区7・8号復旧土坑(図10, 写真PL.5)

規模・形状 短軸1.3～2.0m、長軸2.7～5.2m、深さ10～15cmで、いずれも東西に長軸をもつ不整形な長方形。底面小さな起伏があるが全体に平坦で、掘削痕は不明瞭。**充填物** 純層に近い浅間A軽石で、小さな土壌

塊を僅かに含む。**遺物** 無し。**重複** 無し。**所見** 両者は隣接するが重複がないことから、1～6号復旧土坑も含めて一連で掘削された可能性が高く、8号復旧土坑の南辺は、南側の地境を意識した配置をとる。充填物の上位に浅間A軽石廃棄後の耕作痕が重複すると思われるが、削平されて不明。

7区9・10・11号復旧土坑(図10, 写真PL.5)

規模・形状 短軸80cm～1.0m、長軸3.2～3.5m、深さ20～30cmで、いずれも南北に長軸をもつやや不整形な長方形。底面底面は下位の浅間B軽石層まで達し、全体にほぼ平坦で、掘削痕は不明瞭。**充填物** 純層に近い浅間A軽石で、小さな土壌塊を僅かに含む。**遺物** 無し。**重複** 充填物の上位に浅間A軽石廃棄後の耕作痕が重複。**所見** いずれも隣接するが重複がないことから、一連で掘削された可能性が高く、11号土坑の東辺及び南辺は東側及び南側の地境にそれぞれ沿った配置をとる。復旧土坑底面の検出作業過程で、復旧土坑に廃棄された浅間A軽石の上位に、浅間A軽石降下後の耕作痕を検出。これらの耕作痕の間隔は芯心に40cm前後だが、浅間A軽石を含む覆土は1条置きに土壌化の状況が異なることから、浅間A軽石復旧後の畑耕作において、条に平行な畝替えが行われた可能性が高い。

14区1号復旧土坑(図11, 写真PL.8)

規模・形状 短軸1.6m、長軸2.8m以上、深さ50cmで、南北に長軸をもつ長方形。底面底面は下位の基本土層Ⅱ層まで達し、全体にほぼ平坦で、掘削痕は不明瞭。**充填物** 純層に近い浅間A軽石で、小さな土壌塊を僅かに含む。**遺物** 無し。**重複** 無し。**所見** この遺跡で最も深い。隣接する2号復旧土坑と北辺が揃うことから、一連で掘削された可能性が高い。

14区2号復旧土坑(図11, 写真PL.8)

規模・形状 短軸1.2m、長軸3.0m以上、深さ10cmで、南北に長軸をもつ長方形。底面底面は段差をもって東半部が深く、掘削痕は不明瞭。**充填物** 純層に近い浅間A軽石で、小さな土壌塊を僅かに含む。**遺物** 無し。**重複** 無し。**所見** 隣接する1号復旧土坑と北辺が揃うことから、一連で掘削された可能性が高い。

34区1・2号復旧土坑(図9, 写真PL.16)

規模・形状 短軸80cm以上、長軸2.8m以上、深さ10～20cmで、いずれも東西に長軸をもつ長方形。底面 全体にはほぼ平坦で、掘削痕は不明瞭。充填物 純層に近い浅

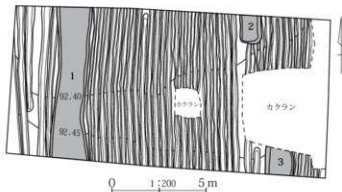


図8 第1面(浅間A軽石混土層下面)5区復旧土坑

1 第1面(浅間A軽石混土層下面)

間A軽石で、小さな土塊を備かに含む。遺物 無し。重複 無し。所見 両者は近接するが重複しないことから、一連で掘削された可能性が高い。定型化した土坑で、長軸を東西方向にとるのはこれらの土坑のみ。

※ 土層断面図は「付図1～3」参照

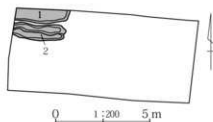
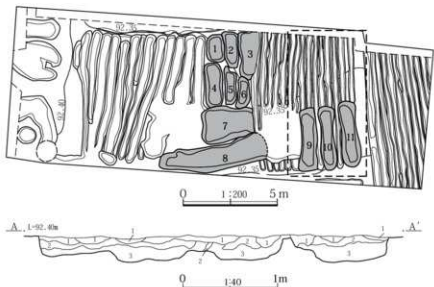


図9 第1面(浅間A軽石混土層下面)34区復旧土坑



1 茶褐色土。多量の浅間A軽石(As-A)含む。 3 浅間A軽石(As-A)二次堆積。φ1～5mmの灰色軽石。捨てられた浅間A軽石。黄褐色土塊含む。
2 茶褐色土。天地返しされた畑耕作土。

図10 第1面(浅間A軽石混土層下面)7区復旧土坑

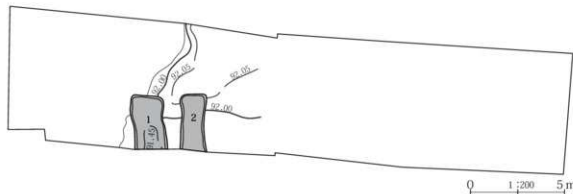
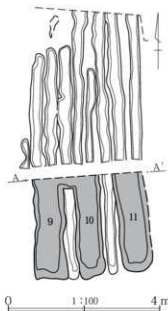


図11 第1面(浅間A軽石混土層下面)14区復旧土坑

II 発見された遺構と遺物

(3) 復旧溝・耕作痕

1区(図12, 写真PL.2)

規模・方向 幅30～40cm、深さ10cmで、南北方向に走行。条間の芯心間隔は約60～70cm。現代の擾乱により確認できた部分は少ないが、明らかな地境は未確認。**底面** 底面は平坦だが、幅約25cm、長さ約40cmで、北あるいは南の方向に傾斜が付く掘削痕が条に平行して二つずつ並ぶ。**充填物** 純層に近い浅間A軽石で、小さな土壌塊を僅かに含む。軽石の上位に掘削で天地返しされた耕作土の一部が残存。**遺物** 無し。**重複** 無し。**所見** 掘削痕の状況から、刃先の幅が25cm前後の鍬状の農具による平行した2回の掘削を連続することで溝を掘り、ここに周囲から集めた浅間A軽石を廃棄し、この上位に溝を掘削した際の浅間A軽石降下以前の土壌を被せた復旧溝と判断。掘削痕の底面の傾きが1条置きに南北に反転することから、一人の耕作者による往復の作業と想定。なお、浅間A軽石降下以前の土壌が耕作土か否かは不明瞭。

5区(図13, 写真PL.4)

規模・方向 幅20～30cm、深さ5～10cmで、南北方向に走行。条間の芯心間隔は約30～40cm。**底面** 断面形は船底状を呈し、掘削痕は不明瞭。**充填物** 浅間A軽石を含むが土壌化の進んだ土壌。**遺物** 無し。**重複** 平面的には未確認だが、土層断面上において復旧土坑の上位に条が重複。**所見** 掘削痕の覆土が浅間A軽石を含んで土壌化していることから、浅間A軽石降下以降の畑耕作に伴う耕作痕と判断。1条置きに浅間A軽石を含む土壌化の状況が異なることから、条に平行した畝替えが行われた可能性が高い。

6区(図15, 写真PL.5)

規模・方向 幅20～30cm、深さ5～10cmで、南北方向に走行。条間の芯心間隔は約30～40cm。条の及ばない東側については、土層断面上において僅かな条の痕跡を一部に確認したことから、本来は存在した可能性が高い。**底面** 断面形は船底状を呈し、掘削痕は不明瞭。**充填物** 浅間A軽石を含むが土壌化の進んだ土壌。**遺物** 無し。**重複** 無し。**所見** 掘削痕の覆土が浅間A軽石を含んで土壌化していることから、浅間A軽石降下以降の畑耕作に伴う耕作痕と判断。1条置きに浅間A軽石を含む土壌

化の状況が異なることから、条に平行した畝替えが行われた可能性が高い。

7区西半部(図16, 写真PL.5)

規模・方向 幅40～50cm、深さ5～10cmで、南半部はやや西側に傾いて南北方向に走行。条間の芯心間隔は約50～60cm。条の南端部は不明瞭だが、北端部は東側に位置する復旧土坑も含めてその端部が揃い、その北側には掘削の及ばない地境が存在。また、西端部にも条が及ばない範囲が存在することから、地境の可能性が高い。**底面** 断面形は緩やかな船底状を呈し、掘削痕は不明瞭。**充填物** 純層に近い浅間A軽石で、小さな土壌塊を僅かに含む。**遺物** 無し。**重複** 無し。**所見** 条の走行がやや変則的で幅が広く、掘削痕の覆土が土壌化していないことから復旧溝と判断。条の北端部が東側に位置する復旧土坑と揃うことから、同一区画内において一連で掘削された可能性が高い。

7区東半部(図16, 写真PL.5)

規模・方向 幅25～30cm、深さ5～10cmで、南北方向に走行。条間の芯心間隔は約30～40cm。西側の南端部は9～11号復旧土坑と南端部が揃い、その南側と11号復旧土坑の東側には地境が存在。**底面** 断面形は船底状を呈し、一部に幅20cm、長さ30cmの鍬状の農具による掘削痕を確認。**充填物** 浅間A軽石を含むが土壌化の進んだ土壌。**遺物** 無し。**重複** 9～11号復旧土坑の上位に条が重複。**所見** 条が復旧土坑の上位に位置すること、掘削痕の覆土が浅間A軽石を含んで土壌化していることから、浅間A軽石降下以降の畑耕作に伴う耕作痕と判断。1条置きに浅間A軽石を含む土壌化の状況が異なることから、条に平行した畝替えが行われた可能性が高い。

8区(図14, 写真PL.6)

規模・方向 幅20～30cm、深さ5～10cmで、南北方向に走行。条間の芯心間隔は約40～50cm。**底面** 断面形は船底状を呈し、幅20cm、長さ30～40cmの鍬状の農具による掘削痕を確認。**充填物** 純層に近い浅間A軽石で、小さな土壌塊を僅かに含む。**遺物** 無し。**重複** 無し。**所見** 掘削痕の覆土が純層に近い浅間A軽石であることから、復旧溝と判断。但し、これらの溝は土層断面上に

において東西方向でそれぞれ重複し、新しい溝ほど浅間A軽石の純度が低いことから、浅間A軽石降下直後の畑耕作に伴う畝替えされた耕作痕の可能性も考えられる。

9区(図17, 写真PL.6)

規模・方向 幅20～30cm、深さ5～10cmで、南北方向に走行。西端部には東西幅約1.0mの条の及ばない範囲が存在し、これは地境の可能性が高い。条間の芯心間隔は約40～50cm。**底面** 断面形は緩やかな船底状を呈し、幅20cm、長さ30～40cmの鎌状の農具による掘削痕を確認。**充填物** 純層に近い浅間A軽石で、小さな土壌塊を僅かに含む。**遺物** 無し。**重複** 無し。**所見** 掘削痕の覆土が純層に近い浅間A軽石であることから、復旧溝と判断。但し、これらの溝は土層断面上において東西方向でそれぞれ重複し、新しい溝ほど浅間A軽石の純度が低いことから、浅間A軽石降下直後の畑耕作に伴う畝替えされた耕作痕の可能性も考えられる。

29区(図18, 写真PL.13)

規模・方向 幅25～30cm、深さ5～10cmで、西半部は東西方向、東半部は南北方向に走行。条間の芯心間隔は約30～40cm。**底面** 断面形は船底状を呈し、掘削痕は不明瞭。**充填物** 純層に近い浅間A軽石で、小さな土壌塊を含む。**遺物** 無し。**重複** 無し。**所見** 掘削痕の覆土が純層に近い浅間A軽石であることから、復旧溝と判断。

30区(図19, 写真PL.14)

規模・方向 幅20～25cm、深さ5～10cmで、南北方向に走行。条間の芯心間隔は約30～40cm。**底面** 断面形は船底状を呈し、掘削痕は不明瞭。**充填物** 純層に近い浅間A軽石で、小さな土壌塊を僅かに含む。**遺物** 無し。**重複** 無し。**所見** 掘削痕の覆土が純層に近い浅間A軽石であることから、復旧溝と判断。但し、これらの溝は土層断面上において東西方向でそれぞれ重複し、1条置きに新しい溝ほど浅間A軽石の純度が低く、土壌化がやや進んでいることから、浅間A軽石降下直後の畑耕作に伴う畝替えされた耕作痕の可能性も考えられる。

31区(図20, 写真PL.14)

規模・方向 幅15～20cm、深さ5～10cmで、東西方向

に走行。条間の芯心間隔は約25～30cm。**底面** 断面形は船底状を呈し、一部に幅約10cm、長さ約30cmの農具による掘削痕を確認。**充填物** 浅間A軽石と土壌塊の混土の条と、浅間A軽石を含むが土壌化が進んだ条とが1条置きに並ぶ。**遺物** 耕作痕に伴うものはないが、耕作痕の基底面である基本土層VI層上位から瀬戸・美濃陶器の鉄絵皿が出土(26頁図67№10参照)。**重複** 無し。**所見** 掘削痕の覆土が浅間A軽石と土壌塊の混土の条と、浅間A軽石を含むがやや土壌化の進んだ条が1条置きに並ぶことから、浅間A軽石降下以降の畑耕作に伴う耕作痕と判断。1条置きに浅間A軽石を含む土壌化の状況が異なることから、条に平行した畝替えが行われた可能性が高い。なお、耕作痕の基底面である基本土層VI層上位から出土した瀬戸・美濃陶器の鉄絵皿の年代が17世紀と考えられることから、VI層の年代は江戸時代前期と想定でき、これは上位に天明三年(1783)の浅間A軽石を含む復旧溝・耕作痕が位置することの矛盾がない。

32区(図21, 写真PL.15)

規模・方向 幅20～30cm、深さ5～10cmで、西端部と南半部は東西方向、北半部は南北方向に走行。条間の芯心間隔は約30～40cm。方向の異なる条の間には、条の及ばない地境が存在。**底面** 断面形は緩やかな船底状を呈し、掘削痕は不明瞭。**充填物** 浅間A軽石を含むが土壌化の進んだ土壌。**遺物** 無し。**重複** 無し。**所見** 掘削痕の覆土が浅間A軽石を含んで土壌化していることから、浅間A軽石降下以降の畑耕作に伴う耕作痕と判断。1条置きに浅間A軽石を含む土壌化の状況が異なることから、条に平行した畝替えが行われた可能性が高い。

33区(図22, 写真PL.15)

規模・方向 幅20～30cm、深さ5～10cmで、西端部は東西方向、西端部以東は南北方向に走行。条間の芯心間隔は約30～40cm。**底面** 断面形は緩やかな船底状を呈し、掘削痕は不明瞭。**充填物** 浅間A軽石を含むが土壌化の進んだ土壌。**遺物** 無し。**重複** 無し。**所見** 掘削痕の覆土が浅間A軽石を含んで土壌化していることから、浅間A軽石降下以降の畑耕作に伴う耕作痕と判断。1条置きに浅間A軽石を含む土壌化の状況が異なることから、条に平行した畝替えが行われた可能性が高い。

II 発見された遺構と遺物

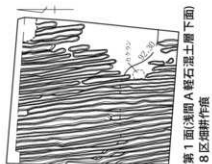


図13 第1面(浅間A軽石混土層下面) 8区燧耕作痕

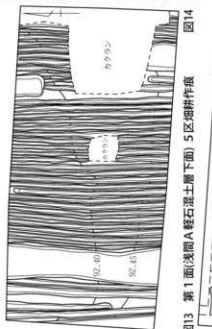


図14 第1面(浅間A軽石混土層下面) 5区燧耕作痕

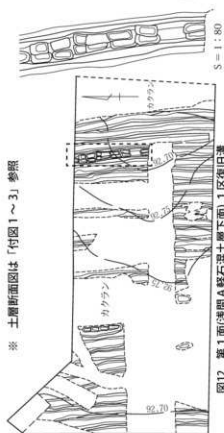


図15 第1面(浅間A軽石混土層下面) 1区復旧溝

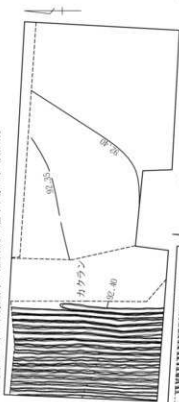


図16 第1面(浅間A軽石混土層下面) 7区復旧溝・燧耕作痕



図17 第1面(浅間A軽石混土層下面) 6区燧耕作痕

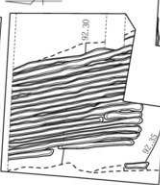


図18 第1面(浅間A軽石混土層下面) 29区燧耕作痕

図19 第1面(浅間A軽石混土層下面) 30区燧耕作痕

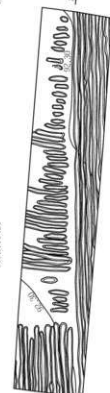


図20 第1面(浅間A軽石混土層下面) 31区燧耕作痕



図21 第1面(浅間A軽石混土層下面) 32区燧耕作痕

図22 第1面(浅間A軽石混土層下面) 33区燧耕作痕

※ 土層断面図は「付図1～3」参照

2 第2面(浅間B軽石・B混土層下面)

(1)概要

調査面の第2面は、基本土層Ⅷ層及びⅨ層の下面である。Ⅸ層は浅間B軽石(As-B)の一次堆積層であり、これは調査対象地のほぼ全域に厚層約10cmの良好な状態で遺存していた。基本的にはこれを除去した面が調査面の第2面である。但し、調査区の一部には浅間B軽石の一次堆積層が存在せず、多量の浅間B軽石を含むいわゆる浅間B混土層の地区が存在したことから、浅間B混土層(Ⅷ層)の下面も浅間B軽石層下面の相当層として第2面として扱った。したがって、第2面の水田は浅間B軽石層(Ⅸ層)直下の旧地表面としての水田と、Ⅷ層下面の浅間B軽石降下以降の擬似畦畔として検出した水田の両者が存在し、これは各地区ごとの検出状況に示した。

Ⅷ層下面の擬似畦畔としての水田は、微高地状を呈する調査区域西端部の一部のみで検出し(1区)、ここを除く全ては浅間B軽石層(Ⅸ層)下面の旧地表面としての水田である。東西方向に走行する現道の拡幅という事業上の性格から、南北方向の調査範囲が約3～8mと狭い。したがって、四方を畦で囲まれた一区画の水田の全てを検出した部分は皆無で、区画の状況を検討する資料を欠く。一方、幅約2m、残存する高さ約10cmの大畦を一部に確認し(7～12・35・38区)、これらは1町(109m)間隔で配置された条里地割の坪境の畦である可能性が高い(27頁「岩押Ⅲ遺跡の浅間B軽石層下水田と条里地割」参照)。

また、水田面及び畦畔の状況は大別して、①水田面及び畦畔が平坦で全体に風化が進んでいる区画(4～6区・26～30区)、②水田面に小さな凹凸が存在し、畦の高さが比較的高い区画(14～16区・37～40区)、③水田面及び畦畔の状況が①と②の中間的な区画(7～13区・32～36区)の3種類に分けられ、これらは水田耕作から浅間B軽石の降下までに、それぞれ時間差が存在することを示しているものと判断した。

第2面の調査面では前記の水田及びこれに伴う用水路の他、浅間B軽石降下以降の溝、河道を検出した。溝は覆土に浅間B軽石を多量に含む浅間B軽石降下以降のものや(21区)、浅間B軽石以降の洪水層で埋没するもの(24区)が存在するが、いずれも伴出遺物が皆無で詳細な年代を判定する資料を欠く。



図23 第2面(浅間B軽石・B混土層下面)全体図(S=1:2,500, 高崎市都市計画図に加算)

(2)水田

1区(図24, 写真PL.2-3)

検出 基本土層Ⅷ層下面。多量の浅間B軽石を含むいわゆる浅間B混土層の下面で、浅間B軽石降下以降の擬似畦畔として確認。畦の走行と区画原地形に沿って北西から南東の方向と、これに直交する方向の畦の一部を確認。区画は不明。**耕作土** 多量の浅間B軽石を含む暗茶褐色土(Ⅷ層)で、層厚約10cm。イネのプラント・オパールは8,100～10,300個/gと高い数値で、この層が耕作土であることを示す。**水田基底面** ほぼ平坦で、耕作痕は不明瞭。**畦の状況** 上幅40cm、下幅70cm、高さ5～10cm。**水口** 不明。**用水路** 無し。**遺物** 無し。**年代** 12世紀初頭に降だが、詳細な年代は不明。**所見** 浅間B軽石降下以降の擬似畦畔として確認した唯一の地区で、微高地上に位置する。現東口線を挟む南側の21区の浅間B軽石層下水田の畦畔がほぼ南北に走行するのに対して、畦の走行が大きく異なる。なお、この地区の東端部に位置する2・3号溝より東側は、調査より下位に達する擾乱が著しく調査は不可能(写真PL.3)。1～3号溝については「(3)溝」参照。

2区(写真PL.3)

概要 この地区も1区と同様に調査範囲の全面に浅間B軽石層の一次堆積が存在せず、基本土層Ⅷ層の多量の浅間B軽石を含むいわゆる浅間B混土層の下面を調査面とし、微高地上に位置する。Ⅷ層の下位はⅫ層になり、Ⅻ層の上位には3世紀後半以降に降した浅間C軽石(As-C)を含むことから、浅間B軽石降下以降におけるⅧ層の攪拌は、少なくとも古墳時代前期以前の層位まで及んでいる。したがって、水田面は検出できず、他の遺構・遺物も確認できない。

3区(写真PL.3)

検出 浅間B軽石の一次堆積が残存していたのは、調査区東半部の4・5号溝より北側のみで、調査範囲の大半が基本土層Ⅷ層の多量の浅間B軽石を含むいわゆる浅間B混土層の下面。浅間B軽石層は層厚10cmの良好な状態で遺存。**畦の走行と区画** 畦は未確認。**耕作土** 層厚10cmの粘質灰黒色土。イネのプラント・オパールは5,900個/gと高い数値で、これが耕作土であることを示す。な

お、この下位のⅫ層からは1,500個/gと少ない。Ⅻ層の上位には3世紀後半以降に降した浅間C軽石(As-C)を含むことから、古墳時代前期前後においてはこの地で水田耕作が行われた可能性は低い。**水田面の状況** 小さな起伏が多いが、全体にはほぼ平坦。**用水路** 無し。**遺物** 無し。**年代** 12世紀初頭。**所見** 浅間B軽石層の直下で検出した面ではあるが、畦は確認できず水田か否か不明。水田面であるとしたら、火山灰の降下時には既に廃棄されて、風化が進んでいたものと考えられる。なお、4～7号溝については「(3)溝」参照。

4区(図26, 写真PL.4)

検出 基本土層Ⅺ層(As-B)下面。**畦の走行と区画** 小畦の走行はほぼ南北方向。区画は不明。**耕作土** 小畦より西側は粘質茶褐色土、東側は粘質灰黒色土で、層厚約5cm。**水田面の状況** ほぼ平坦だが、小畦を境に東側がやや低い。**畦の状況** 上幅40cm、下幅70cm、高さ数cmで、やや風化。**水口** 不明。**用水路** 東端部に確認。両側が幅30cmの畦状に高まり、中央部の幅30cmが窪むが、全体に風化して平坦。北西から南東に走行し、28区の用水路に接続すると推定。**遺物** 無し。**年代** 12世紀初頭。**所見** 水田面、畦、用水路ともに風化しており、浅間B軽石の降下時には既に廃棄されていたものと推定。

5区(図27, 写真PL.4・5)

検出 基本土層Ⅺ層(As-B)下面。**畦の走行と区画** 小畦の走行は北西から南東。区画は不明。**耕作土** 粘質灰黒色土で、層厚約5cm。**水田面の状況** 全体に風化が著しく、ほぼ平坦。**畦の状況** 上幅50cm、下幅80cm、高さ数cm。風化してほぼ平坦。**水口** 畦の北側に幅20cmで確認。水田面の標高は東側が低いことから、西→東に配水。**用水路** 無し。**遺物** 無し。**年代** 12世紀初頭。**所見** 水田面、畦ともに風化しており、浅間B軽石の降下時には既に廃棄されていたものと推定。

6区(図25, 写真PL.5)

検出 基本土層Ⅺ層(As-B)下面。**畦の走行と区画** 小畦の走行は東西及び南北の方向で、条里地割に直交あるいは平行。区画は不明。南東隅の畦は7区で確認した大畦の続き。**耕作土** 粘質灰黒色土で、層厚約5cm。イネの

プラント・オパールは5,700～8,300個/gで、高い数値を示す。**水田面の状況** 全体に風化してほぼ平坦で、風化度は中間的。**畦の状況** 南北方向の小畦は下幅80cm、高さ数cm、東西方向の小畦は下幅50cm、高さ数cm。いずれも風化してほぼ平坦。**水口** 無し。**用水路** 無し。**遺物** 無し。**年代** 12世紀初頭。**所見** 水田面、畦ともに風化が進んでいる。一方、イネのプラント・オパールは高い数値を示していることから、水田耕作の終了時期から浅間B軽石の降下までに、長い時間が経過していた可能性が高い。

7区(図28, 写真PL.6)

検出 基本土層IX層(As-B)下面。大畦の上位はVIII層の浅間B混土層で、一次堆積はその基部のみ。**畦の走行と区画** 走行は東西及び南北の方向。大畦はN-89°-E。中央部の南北の小畦を除いて、条里地割に直交あるいは平行。区画は不明。**耕作土** 粘質灰黒色土で、層厚約5cm。イネのプラント・オパールは8,300～13,200個/gと高い数値を示す。なお、この耕作土の下位に位置するXI層は11,200～14,200個/gと非常に高い数値を示し、水田面としては検出できなかったが、水田耕作土である可能性が高い。**水田面の状況** 全体に小さな起伏がやや多く、風化度は中間的。**畦の状況** 大畦は上幅1.5m、下幅2.0m、高さ10cm、中央部の南北方向の小畦は上幅30cm、下幅70cm、高さ5cmで、これ以外的小畦は下幅50cm、高さ数cmで風化してほぼ平坦。**水口** 水口1は幅60cmで、勾配は南→北。水口2は幅40cmで、西→東。水口3は幅30cmで、西→東。**用水路** 無し。**遺物** 耕作土であるX層内から須恵器碗が出土(26頁図67No.8, PL.20)。**年代** 12世紀初頭。**所見** 大畦の軸線が、35・38区で確認した109m間隔の大畦の軸線に直交することから、条里地割の環境の畦と判断。水田面、畦ともに風化度は中間的。

8・9区(図29・30, 写真PL.6・7)

検出 基本土層IX層(As-B)下面。大畦の上位はVIII層の浅間B混土層で、一次堆積はその基部のみ。**畦の走行と区画** 大畦の走行は7区から続くが、9区で畦の高まりはほぼ消滅。区画は不明。**耕作土** 粘質灰黒色土で、層厚約5cm。**水田面の状況** 全体に小さな起伏がやや多く、平坦化して風化が進む。**畦の状況** 8区の東西畦は下幅

1.2m、高さ数cmで、ほぼ平坦化。9区は上幅1.5m、下幅1.8m、高さ5cm。**水口** 無し。**用水路** 無し。**遺物** 無し。**年代** 12世紀初頭。**所見** 大畦の軸線が7区大畦の軸線に近く、条里地割の環境の畦と判断。9区の東側は低地部を呈すが、その東側に隣接する10区の西側は微高地となり、その境は未調査の道路部分にあると想定。水田面、畦ともに風化度は中間的。

10区(図31, 写真PL.7)

検出 基本土層IX層(As-B)下面。中央部の北西から南東方向の段差より東側に浅間B軽石が残存。大畦の上位は浅間B軽石が覆控されることによって形成されたVIII層の浅間B混土層で、一次堆積はその基部のみ。**畦の走行と区画** 微高地の東端部から延びた大畦の走行は、西側に隣接する7～9区の大畦の軸線とほぼ同様。大畦はN-89°-E。区画は不明。**耕作土** 粘質灰黒色土で、層厚約5cm。**水田面の状況** 全体に小さな起伏がやや多く、風化度は中間的。**畦の状況** 大畦は上幅1.3m、下幅2.2m、高さ5cm。**水口** 無し。**用水路** 無し。**遺物** 無し。**年代** 12世紀初頭。**所見** 大畦の軸線が7～9区の大畦の軸線に近いことから、西側の微高地を挟んで継続する条里地割の環境の畦と判断。水田面、畦ともに風化度は中間的。微高地から畦が延びる例は38区とこの地区の2例のみで、これらは微高地部が水田化されていないことを明確に示すものと考えられる。

11区(図32, 写真PL.7)

検出 基本土層IX層(As-B)下面。大畦の上位は、浅間B軽石層が覆控されて形成されたVIII層の浅間B混土層で、一次堆積層はその基部のみ。**畦の走行と区画** 10区から続く東西方向の大畦と、これにほぼ直交する南北方向の小畦。大畦はN-89°-E。区画は不明。**耕作土** 粘質灰黒色土で、層厚約5cm。**水田面の状況** 全体に小さな起伏がやや多く、風化度は中間的。**畦の状況** 大畦は上幅1.0m、下幅2.0m、高さ5cm。南北の小畦は下幅70cm、高さ数cm。**水口** 西側の南北の小畦に確認。幅20cmで、勾配はその両側がほぼ平坦で不明。**用水路** 無し。**遺物** 無し。**年代** 12世紀初頭。**所見** 大畦の軸線が7～10区の大畦の軸線に近いことから、条里地割の環境の畦と判断。水田面、畦ともに風化度は中間的。

12区(図33, 写真PL.8)

検出 基本土層Ⅰ層(As-B)下面。畦の走行と区画 北側の調査区域界に、西側に隣接する11区から続く東西南方向の大畦と、これにほぼ直交及び平行する南北・東西南方向の小畦。区画は不明。**耕作土** 粘質灰黒色土で、層厚約5cm。**水田面の状況** 全体に小さな起伏がやや多く、風化度は中間的。**畦の状況** 大畦は調査区域界のため規模は不明、高さ10cm、小畦はいずれも下幅40cm、高さ数cm。**水口** 東西南方向の小畦に確認。幅40cmで、勾配は北西→南東。**用水路** 無し。**遺物** 無し。**年代** 12世紀初頭。**所見** 大畦の軸線が7～10区の大畦の軸線に近いことから、条里地割の坪壇の畦と判断。水田面、畦ともに風化度は中間的。

13区(図34, 写真PL.8)

検出 基本土層Ⅰ層(As-B)下面。畦の走行と区画 やや傾いた東西南方向と南北方向の小畦が鋭角に接続し、その延長上に幅2.0m、高さ5cmの高まりが存在。区画は不明。**耕作土** 粘質灰黒色土で、層厚約5cm。**水田面の状況** 全体に小さな起伏がやや多く、風化度は中間的。**畦の状況** 小畦は下幅70cm～1.0m、高さ数cm。**水口** 東西南方向の小畦に確認。幅60cmで、勾配は北→南。**用水路** 無し。**遺物** 無し。**年代** 12世紀初頭。**所見** 水田面、畦ともに風化度は中間的。北側の高まりは畦が否か不明。

14区(図35, 写真PL.9)

検出 基本土層Ⅰ層(As-B)下面。畦の走行と区画 調査区の西側と東側に南西から北東方向の小畦、中央部は南北方向と東西南方向のそれぞれ小畦。区画は不明。**耕作土** 粘質灰黒色土で、層厚約5cm。**水田面の状況** 全体に小さな起伏がやや多く、風化度は低い。水田面は全体にほぼ平坦だが、調査区東側の南西から北東方向の畦を境に南東側が低くなる。**畦の状況** 小畦は下幅40cm～50cm、高さ数cm～5cm。**水口** 水口1・2は幅50～80cmで、勾配は北西→南東。水口3は幅90cmで、北→南。水口4は幅60cmで、北→南。**用水路** 無し。**遺物** 無し。**年代** 12世紀初頭。**所見** 水田面、畦ともに風化度は低い。調査区西側と東側の南西から北東方向の畦は等高線にほぼ沿った方向の走行で、ほぼ東西に走行する条里地割の軸線とは方向を大きく異にする。

15・16区(図36-37, 写真PL.9)

検出 基本土層Ⅰ層(As-B)下面。畦の走行と区画 南北方向と南西から北東方向(15区)、及び東西南方向(16区)の小畦。区画は不明。**耕作土** 粘質灰黒色土で、層厚約5cm。**水田面の状況** 全体に小さな起伏がやや多く、風化度は低い。水田面は全体にほぼ平坦だが、調査区東側の畦を境に南東側が低くなる。**畦の状況** 中央部と東側の小畦は下幅1.0m、西端部の畦は西側が調査区域界で規模は不明。高さはいずれも数cm～5cm。**水口** 無し。**用水路** 無し。**遺物** 無し。**年代** 12世紀初頭。**所見** 水田面、畦ともに風化度は低い。15区東側の南西から北東方向の畦は等高線にほぼ沿った方向の走行で、条里地割とは方向を異にする。一方、15区西端部の南北方向の畦は、38区で検出した条里地割の可能性が高い大畦の軸線に近く、西側が調査区域外で規模は不明だが大畦の可能性も考えられる。

18・19区(図38-39, 写真PL.10)

検出 基本土層Ⅰ層(As-B)下面。畦の走行と区画 南北方向と、やや傾いた東西南方向の小畦。区画は不明。**耕作土** 粘質灰黒色土で、層厚約5cm。**水田面の状況** 全体に小さな起伏がやや多く、風化度は中間的。水田面は全体にほぼ平坦。**畦の状況** 南北方向の小畦は下幅80cm、東西南方向は下幅50cmで、高さはいずれも数cm～5cm。**水口** 19区水口1は幅30cmで、勾配は北東→南西。**用水路** 無し。**遺物** 無し。**年代** 12世紀初頭。**所見** 水田面、畦ともに風化度は中間的。南北方向の3本の畦は、41・42区の畦とそれぞれ接続する可能性が高く、19区中央部の南北畦は、大畦ではないが条里地割の109mの線上に位置する。

20区(写真PL.10)

検出 基本土層Ⅰ層(As-B)下面。畦の走行と区画 調査範囲が狭いために畦は未確認だが、地表面は水田面と思われる状況を示す。**耕作土** 粘質灰黒色土で、層厚約5cm。**水田面の状況** 全体に小さな起伏がやや多く、風化度は低い。水田面は全体にほぼ平坦。南西部を後世の9号溝が北西から南東の方向に掘り込む。**用水路** 無し。**遺物** 無し。**年代** 12世紀初頭。**所見** 水田面、畦ともに風化度は低い。16区付近を境に地形は東側に向かって

徐々に高くなり、この地点より東側(環状線側)は次第に微高地へと推移するものと考えられるが、この地点においてはまだ水田面を形成する。なお、9号溝については「(3)溝」参照。

21区(図40, 写真PL. 11)

検出 基本土層IX層(As-B)下面。中央部の用水路より西側のみ浅間B軽石が残存。**畦の走行と区画** 走行はほぼ真北方向。区画は不明。**耕作土** 一般的な粘質黒褐色土ではなく、粘質茶褐色土。**水田面の状況** ほぼ平坦だが、全体に西側から東側にかけて僅かに傾斜。**畦の状況** 上幅20cm、下幅30cm、高さ5cmで、やや風化。**水口** 不明。**用水路** 不明。**遺物** 無し。**年代** 12世紀初頭。**所見** 畦の走行が、東側に隣接する浅間B軽石降下以降の用水路と考えられる10号溝とほぼ平行して走行することから、この10号溝は浅間B軽石の降下以前から存在した可能性が高い。10号溝については「(3)溝」参照。なお、この地区の東側は調査面まで達する擾乱が著しく、調査は不可能。

22・23区(写真PL. 11)

概要 トレンチ調査の結果、両地区ともに調査面より下位にまで達する擾乱が著しく、調査は不可能。

24区(写真PL. 11-12)

検出 浅間B軽石の一次堆積層が残存していたのは、11号溝より南西側の一部のみで、調査範囲の大半が基本土層VIII層の多量の浅間B軽石を含むいわゆる浅間B混土層の下面。浅間B軽石層は層厚5cmの良好な状態で遺存。**畦の走行と区画** 浅間B軽石層の遺存した範囲が狭く、畦は未確認。**耕作土** 浅間B軽石層直下の土壌は、粘質灰黒色土で層厚約5cm。**水田面の状況** 小さな起伏が多いが、全体にほぼ平坦。調査区の北西隅から南側の中央部にかけて、後世の11号溝が北西から南東の方向に掘り込む。**用水路** 無し。**遺物** 無し。**年代** 12世紀初頭。**所見** 微高地上に位置し、浅間B軽石層の直下面を極一部に検出したが、畦畔が確認できないために水田か否かは不明。水田面であるとすれば、火山灰の降下時には既に廃棄されて、風化が進んでいたものと考えられる。なお、11号溝については「(3)溝」参照。

25区(写真PL. 12)

概要 微高地上に位置し、調査範囲の全面に浅間B軽石の一次堆積層が存在せず、基本土層VIII層の多量の浅間B軽石を含むいわゆる浅間B混土層の下面を調査面とした。調査区域の東半部には、浅間B軽石降下以降で北西から南東方向の13・14号溝が走行する。**遺物** 調査区域中央部の微高地上の遺構外(Ⅷ層中)から、土師器高環の脚部が出土(26頁図67No.9, PL. 20)。**所見** 微高地上で水田面は検出できず、溝のみを検出。微高地上の遺構外から出土した土師器高環は5世紀前半と考えられ、周辺には該期の集落が存在する可能性がある。なお、12～14号溝については「(3)溝」参照。

26・27区(図41-42, 写真PL. 12-13)

検出 基本土層IX層(As-B)下面。**畦の走行と区画** 26区はほぼ東西・南北方向の小畦。区画は不明。27区は畦未確認。**耕作土** 粘質茶褐色土で、層厚約5cm。**水田面の状況** 全体に風化が著しく、ほぼ平坦。**畦の状況** 下幅50cm、高さ数cm。風化してほぼ平坦。**水口** 無し。**用水路** 無し。**遺物** 無し。**年代** 12世紀初頭。**所見** 水田面、畦ともに風化しており、浅間B軽石の降下時には既に廃棄されていたものと推定。26区東端部の南北畦は、4区の畦に接続する可能性が高い。

28区(図43, 写真PL. 13)

検出 基本土層IX層(As-B)下面。**畦の走行と区画** 畦は未確認で、用水路のみ検出。**耕作土** 粘質灰黒色土で、層厚約5cm。**水田面の状況** 用水路を境に東側がやや低い。全体に風化して、ほぼ平坦。**水口** 不明。**用水路** 両側が幅60cm、高さ数cmの畦状に高まり、中央部が幅70cm、深さ数cmで窪むが、全体に風化して平坦。北西から南東に走行し、4区の用水路に接続すると推定。**遺物** 無し。**年代** 12世紀初頭。**所見** 水田面、用水路ともに風化して平坦化しており、浅間B軽石の降下時には既に廃棄されていたものと推定。

29・30・31区(図44-45-46, 写真PL. 13-14)

検出 基本土層IX層(As-B)下面。**畦の走行と区画** やや傾いた南北・東西方向(30区)の小畦。区画は不明。31区は畦未確認。**耕作土** 粘質黒褐色土で、層厚約5cm。**水**

II 発見された遺構と遺物

田面の状況 全体に風化して、ほぼ平坦。31区で人の足跡を検出。幅10cm、長さ24cm、深さ5cmで、浅間B軽石で直接埋没。この他にも数個確認したが、行跡は不明。**畦の状況** 南北畦は下幅80cm、高さ数cm、東西畦は下幅50cm、高さ数cm、いずれも風化してほぼ平坦だが、29区はやや高い。**水口** 30区の水口は幅50cm、勾配は平坦で不明。**用水路** 無し。**遺物** 無し。**年代** 12世紀初頭。**所見** 水田面、畦ともに風化しており、浅間B軽石の降下時には既に廃棄されていたものと推定。東西・南北方向の畦ともにやや傾いて、条里地割に平行しない。

32・33区(図47-48, 写真PL. 15)

検出 基本土層X層(As-B)下面。**畦の走行と区画** 南北方向(32区)の小畦。区画は不明。33区は畦未確認。**耕作土** 粘質黒褐色土で、層厚約5cm。**水田面の状況** 全体に小さな起伏がやや多く、風化度は中間的。**畦の状況** 南北畦は上幅30cm、下幅60cm、高さ5cm。風化してやや平坦。**水口** 無し。**用水路** 無し。**遺物** 無し。**年代** 12世紀初頭。**所見** 南北畦は北側の8区の畦に接続する可能性も考えられる。水田面、畦ともに風化度は中間的。33区の東側は低地部を呈すが、その東側に隣接する34区は微高地となり、低地と微高地の境は東側の未調査である道路部分にあると想定。32区の南北畦から少なくとも東西20mの間に畦は存在しない。

34区(図50, 写真PL. 16)

検出 基本土層X層(As-B)下面だが、浅間B軽石が残存するのは微端部の極一部のみで、調査範囲の大半は微高地を呈す。**畦の走行と区画** 畦は未確認。**用水路** 無し。**遺物** 無し。**所見** 西端部が直径約3m、深さ60cmの円形に掘り込まれ、これに北側から上幅1.8m、下幅80cm、深さ20cmの溝が接続。浅間A軽石以前の溜池状の遺構と考えられるが、詳細は不明。

35区(図49, 写真PL. 16-17)

検出 基本土層X層(As-B)下面。**畦の走行と区画** 西側に南北方向の大畦と、東側に南北・東西方向の小畦。大畦はN-1°-W。区画は不明。**耕作土** 粘質黒褐色土で、層厚約5cm。**水田面の状況** 全体に小さな起伏がやや多く、風化度は中間的。南北の大畦・小畦を境に、それぞ

れその東側が低くなる。**畦の状況** 大畦は上幅1.0m、下幅1.8m、高さ10cm。小畦は上幅40cm、下幅70cm、高さ数cmで、風化してやや平坦。**水口** 無し。**用水路** 無し。**遺物** 無し。**年代** 12世紀初頭。**所見** 大畦は38区の大畦との芯心間隔が109mであることから、条里地割の坪境の畦と判断し、南北小畦もほぼ平行する。水田面、畦ともに風化度は中間的。

36区(図51, 写真PL. 17)

検出 基本土層X層(As-B)下面。**畦の走行と区画** 南北方向と南西から北東方向の小畦。区画は不明。**耕作土** 粘質黒褐色土で、層厚約5cm。**水田面の状況** 全体に小さな起伏がやや多く、風化度は中間的。**畦の状況** 小畦はいずれも下幅60cm、高さ数cm。風化してやや平坦。**水口** 西側の南北畦に幅20cmで、勾配は西→東。**用水路** 無し。**遺物** 無し。**年代** 12世紀初頭。**所見** 南北畦は条里地割の軸線に近いが、東西方向は大きく傾く。水田面、畦ともに風化度は中間的。

37区(図52, 写真PL. 17-18)

検出 基本土層X層(As-B)下面。**畦の走行と区画** 南北方向と南西から北東方向の小畦。区画は不明。**耕作土** 粘質黒褐色土で、層厚約5cm。8地点におけるイネのブランド・オパールは4,300～11,900個/gと高い値を示す。特にこのブランド・オパール分析は、浅間B軽石層直下の水田耕作土(X層)における表層付近から採取した。**水田面の状況** 全体に小さな起伏が多く、畦も比較的に明瞭で風化度は低い。南北畦を境に東側がやや低くなる。**畦の状況** 南北と東側の小畦は上幅60cm、下幅1.0m、高さ数cm～5cm。西側の小畦は下幅50cm、高さ数cmで、風化してやや平坦。**水口** 西側の東西畦に幅20cmで、勾配は北→南。**用水路** 無し。**遺物** 無し。**年代** 12世紀初頭。**所見** 南北畦は条里地割の軸線に近いが、東西畦の方向はそれに直交する軸線より大きく傾く。水田面、畦ともに風化度は低い。耕作土の表層付近におけるイネのブランド・オパールが4,300～11,900個/gと高い数値を示すことは、このブランド・オパールが周囲のブランド・オパールを含む土壌からの移動によってもたらされたものではなく、この層自体が水田耕作土であることを示すものと考えられる。

38区(図53, 写真PL. 18)

検出 基本土層Ⅰ層(As-B)下面。**畦の走行と区画** 南北方向の大畦・小畦と、東西方向の小畦。大畦はN-1°-W。区画は不明。**耕作土** 大畦を境に西側が層厚数cmの粘質黒色土で、東側は層厚5cmの粘質灰黒色土。**水田面の状況** 全体に小さな起伏が多く、風化度は低い。大畦を境に西側は約10cm低くなる。**畦の状況** 大畦は上幅1.0m、下幅1.8m、高さ10cm。東側の南北畦は上幅50cm、下幅80cm、高さ5cm。他の小畦は下幅50cm、高さ数cmで、風化してやや平坦。**水口** 水口1は幅20cmで、勾配は不明瞭。水口2は幅20cmで、勾配は南→北。水口3・4は幅10～20cmで、勾配は不明瞭。**用水路** 無し。**遺物** 無し。**年代** 12世紀初頭。**所見** 南北大畦は35区で検出した南北大畦との芯の間隔が109mであることから、条里地割の坪境の畦と判断した。南北小畦もほぼこの軸線に平行する。また19・42区は小畦だが、この芯の間隔も109mとなる。水田面、畦ともに風化度は低い。

39区(図54, 写真PL. 18)

検出 基本土層Ⅰ層(As-B)下面だが南側は微高地で、浅間B軽石が残存するのは微高地の北側と東側のみ。**畦の走行と区画** 微高地の東側から迫り出すように畦が延び、東端部は直線的となる。区画は不明。**耕作土** 粘質灰黒色土で、層厚は5cm。**水田面の状況** 全体に小さな起伏がやや多く、風化度は中間的。**畦の状況** 上幅70cm、下幅1.4m、高さ5cm。**水口** 無し。**用水路** 無し。**遺物** 無し。**年代** 12世紀初頭。**所見** 微高地から畦が延びる例は10区とこの地区の2例のみで、これらは微高地部が水田化されていないことを明確に示すものと考えられる。水田面、畦ともに風化度は中間的。

40区(図55, 写真PL. 19)

検出 基本土層Ⅰ層(As-B)下面。**畦の走行と区画** 東西・南北方向の畦だが、南北方向は小・中規模の畦2条が平行して、その間が用水路となる。区画は不明。**耕作土** 粘質灰黒色土で、層厚は5cm。**水田面の状況** 全体に小さな起伏が多く、風化度は低い。**畦の状況** 東西畦は上幅70cm、下幅1.2m、高さ5cm。用水路西側の南北畦は上幅50cm、下幅1.0m、高さ5cm。用水路東側の南北畦は上幅1.0m、下幅1.6m、高さ10cmだが、東側に延びた畦と

の交点より北側は上幅70cm、下幅1.1mに規模を減じる。全体に風化度が低い。**水口** 無し。**用水路** 南北2条の畦間に上幅80cm、下幅20cm、深さ10cmで、底面の勾配は北→南。**遺物** 無し。**年代** 12世紀初頭。**所見** 明らかな区画としての畦と畦の間に用水路を設けるのは、この地区のみ。南北畦は条里地割の軸線に近いが、東西畦の方向はやや傾く。水田面、畦ともに風化度が低く、畦の残存状態が良好。

41・42区(図56・57, 写真PL. 19・20)

検出 基本土層Ⅰ層(As-B)下面。**畦の走行と区画** ほぼ東西・南北方向の小畦。42区中央の南北畦はN-1°-W。区画は不明。**耕作土** 粘質灰黒色土で、層厚は5cm。**水田面の状況** 全体に小さな起伏がやや多く、風化度は中間的。**畦の状況** 東西・南北畦ともに下幅80cm～1.0m、高さ数cm～5cmで、やや平坦化。**水口** 無し。**用水路** 無し。**遺物** 無し。**年代** 12世紀初頭。**所見** いずれの東西・南北畦ともに、条里地割の軸線に近い。42区中央部の南北畦は小畦ではあるが、38区大畦から109mに位置し、この北側の延長線上には19区中央部の南北畦が位置する。41区の南北畦、42区中央部の南北畦、東側の南北畦の3条は、それぞれ18区、19区の小畦に接続する可能性が高い。水田面、畦ともに風化度は中間的。

43区(図58, 写真PL. 20)

検出 基本土層Ⅰ層(As-B)下面。**畦の走行と区画** 北西から南東の方向の小畦で、調査区中央部で南側に分岐。区画は不明。**耕作土** 粘質灰黒色土で、層厚は約5cm。**水田面の状況** 全体に小さな起伏がやや多く、風化度は中間的。畦を境に南西側が約10cm低くなる。**畦の状況** 下幅1.0～1.2m、高さ数cm。風化してやや平坦化。**水口** 無し。**用水路** 無し。**遺物** 無し。**重複** 調査区の南端部で17号溝と重複。畦及び水田面を17号溝が掘り込む土層断面の所見を得た。**年代** 12世紀初頭。**所見** 畦の走行が北西から南東の方向で、西側に隣接する42区がほぼ東西・南北方向の条里地割の軸線に近いことと対照的。北側の20区で確認した9号溝の方向がこの畦に近い北西から南東の方向であることを考慮すると、この傾斜はおそらく地形面に沿ったものと考えられる。水田面、畦ともに風化度は中間的。

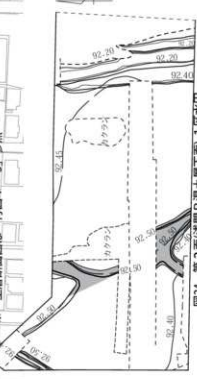


図24 第2面(浅間B軽石層下面)1区水田



図25 第2面(浅間B軽石層下面)6区水田

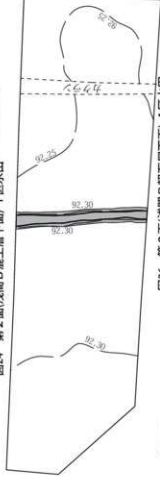


図26 第2面(浅間B軽石層下面)4区水田

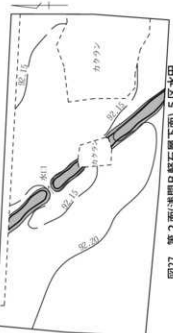


図27 第2面(浅間B軽石層下面)5区水田

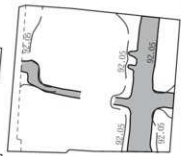


図29 第2面(浅間B軽石層下面)8区水田

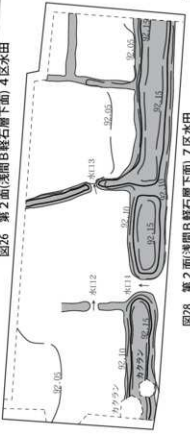


図28 第2面(浅間B軽石層下面)7区水田

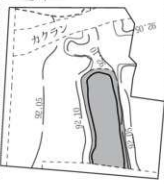


図30 第2面(浅間B軽石層下面)9区水田



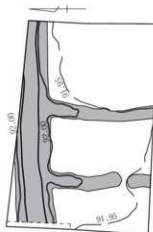


図32 第2面(浅間B軽石層下面)11区水田

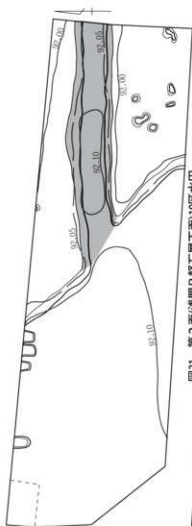


図31 第2面(浅間B軽石層下面)10区水田



図33 第2面(浅間B軽石層下面)12区水田



図35 第2面(浅間B軽石層下面)14区水田

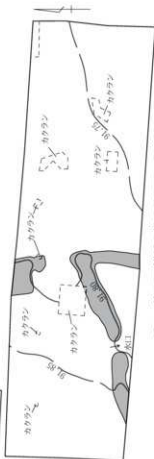


図34 第2面(浅間B軽石層下面)13区水田



図36 第2面(浅間B軽石層下面)15区水田

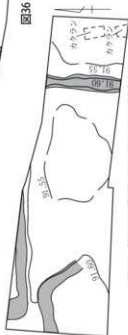


図38 第2面(浅間B軽石層下面)18区水田

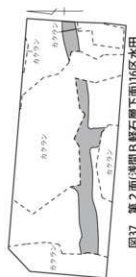


図37 第2面(浅間B軽石層下面)16区水田



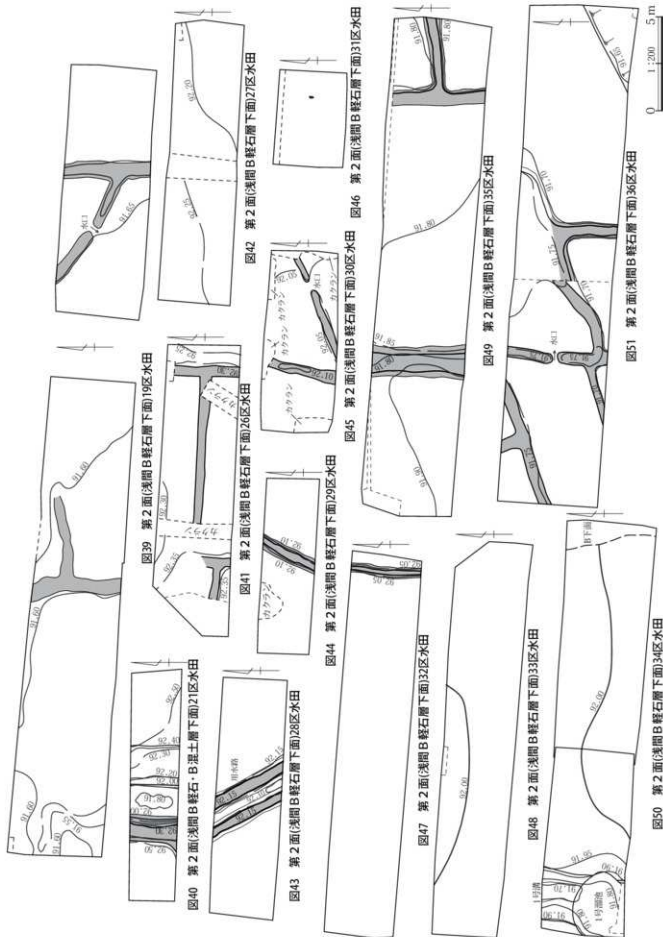




図53 第2面(浅間B軽石層下面)38区水田

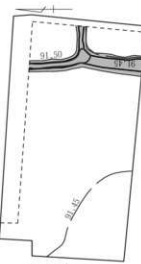


図56 第2面(浅間B軽石層下面)41区水田

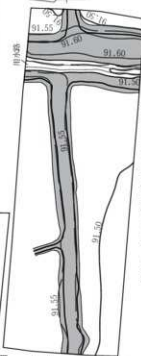


図55 第2面(浅間B軽石層下面)40区水田

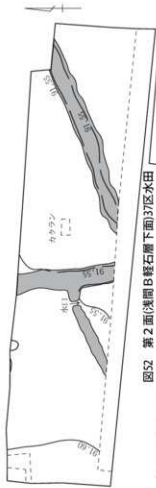


図52 第2面(浅間B軽石層下面)37区水田

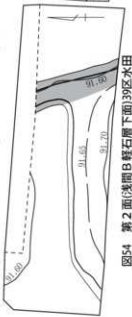


図54 第2面(浅間B軽石層下面)39区水田

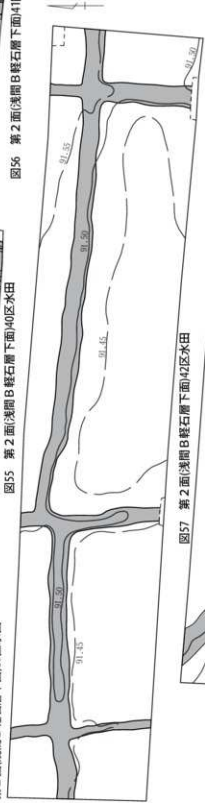


図57 第2面(浅間B軽石層下面)42区水田

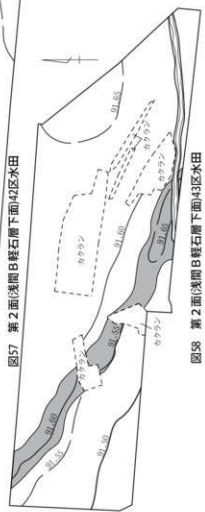


図58 第2面(浅間B軽石層下面)43区水田



(3) 溝

浅間B軽石層下の水田に伴う用水路を除き、それ以外で確認した溝を以下に列記する。

1区2面1号溝(図59)

規模・形状 上幅50cm、下幅20cm、深さ15cm。走行 北北東→南南西。覆土 多量の浅間B軽石を含む暗灰褐色土。遺物 無し。重複 無し。年代 浅間B軽石降下以降だが、伴出遺物が皆無で詳細な年代は不明。所見 性格は不明。

1区2面2号溝(図60, 写真PL.2)

規模・形状 上幅1.0m、下幅60cm、深さ30cm。走行 北北西→南南東。覆土 洪水起源のシルト層。遺物 無し。重複 3溝→2溝の順で新しい。年代 浅間B軽石降下以降だが、伴出遺物が皆無で詳細な年代は不明。所見 用水路の可能性が高い。

1区2面3号溝(図60, 写真PL.2)

規模・形状 2号溝に掘り込まれて不明。走行 北北西→南南東。覆土 洪水起源のシルト層。遺物 無し。重複 3溝→2溝の順で新しい。年代 浅間B軽石降下以降だが、伴出遺物が皆無で詳細な年代は不明。所見 用水路の可能性が高い。

3区2面4号溝(図61, 写真PL.3)

規模・形状 上幅50cm、下幅30cm、深さ10cm。走行 東から西に走行し、南側に屈曲。覆土 浅間A軽石を含む洪水起源のシルト層。遺物 無し。重複 無し。年代 浅間A軽石降下以降だが、伴出遺物が皆無で詳細な年代は不明。所見 性格は不明。

3区2面5号溝(図61, 写真PL.3)

規模・形状 上幅50cm、下幅30cm、深さ10cm。走行 東南東→西北西。6号溝に接続。覆土 浅間A軽石を含む洪水起源のシルト層。遺物 無し。重複 無し。年代 浅間A軽石降下以降だが、伴出遺物が皆無で詳細な年代は不明。所見 性格は不明。

3区2面6号溝(図61, 写真PL.3)

規模・形状 上幅4.0m、下幅3.3m、深さ40cm。走行 北北西→南南東。覆土 洪水起源のシルト層。遺物 無し。重複 無し。年代 浅間B軽石降下以降だが、伴出遺物が皆無で詳細な年代は不明。所見 25区14号溝と同一で、自然流路の可能性も考えられる。

3区2面7号溝(図61, 写真PL.3)

規模・形状 上幅50cm、下幅30cm、深さ20cm。走行 北北西→南南東。覆土 洪水起源のシルト層。遺物 無し。重複 無し。年代 浅間B軽石降下以降だが、伴出遺物が皆無で詳細な年代は不明。所見 性格は不明。

20区2面9号溝(図62, 写真PL.10)

規模・形状 南側が調査区域外で不明。深さ20cm。走行 北北西→南南東。覆土 浅間B軽石を含む洪水砂。遺物 無し。重複 無し。年代 浅間B軽石降下以降だが、伴出遺物が皆無で詳細な年代は不明。所見 性格は不明。

21区2面10号溝(図65, 写真PL.11)

規模・形状 上幅2.7m、下幅1.5m、深さ60cm。走行 北→南。覆土 浅間B軽石を含む洪水砂。遺物 無し。重複 無し。年代 浅間B軽石降下以降だが、伴出遺物が皆無で詳細な年代は不明。所見 用水路の可能性が高い。

24区2面11号溝(図63, 写真PL.11-12)

規模・形状 上幅1.5m、下幅70cm、深さ60cm。走行 北北西→南南東。覆土 浅間B軽石を含む洪水砂。遺物 無し。重複 無し。年代 浅間B軽石降下以降だが、伴出遺物が無く詳細な年代は不明。所見 用水路の可能性。

25区2面12号溝(図64, 写真PL.12)

規模・形状 上幅80cm、下幅40cm、深さ5cm。走行 東北東→西南西。覆土 不明。遺物 無し。重複 12溝↔13溝。年代 浅間B軽石降下以降だが、伴出遺物が皆無で詳細な年代は不明。所見 性格は不明。

25区2面13号溝(図64, 写真PL.12)

規模・形状 上幅30cm、下幅10cm、深さ10cm。走行 北北西→南南東。覆土 不明。遺物 無し。重複 12溝↔13溝。年代 浅間B軽石降下以降だが、伴出遺物が皆無で詳細な年代は不明。所見 性格は不明。

25区2面14号溝(図64, 写真PL.12)

規模・形状 東側が調査区域外で不明。深さ60cm。走行 北北西→南南東。覆土 浅間A軽石を含む洪水起源のシルト層。遺物 無し。重複 無し。年代 浅間A軽石降下以降だが、伴出遺物が皆無で詳細な年代は不明。所見 3区6号溝と同一で、自然流路の可能性も考えられる。

43区2面17号溝(図66, 写真PL.20)

規模・形状 上幅30cm、下幅15cm、深さ15cm。走行 西南西→東北東。覆土 浅間B軽石を含む洪水砂。遺物 無し。重複 無し。年代 浅間B軽石降下以降だが、伴出遺物が皆無で詳細な年代は不明。所見 性格は不明。

※ 土層断面図は「付図1～3」参照

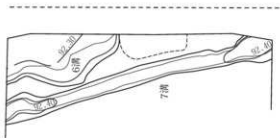


図60 1区2面(As-B混土層下面)2・3号溝

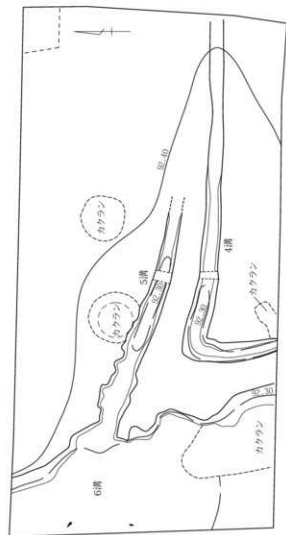


図61 3区2面(As-B混土層下面)4・5・6・7号溝

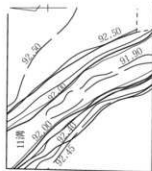


図63 24区2面(As-B混土層下面)11号溝

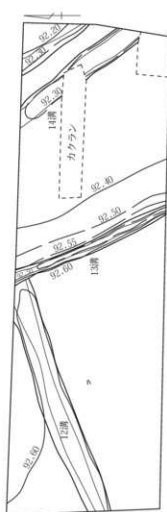


図64 25区2面(As-B混土層下面)12・13・14号溝

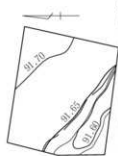


図62 20区2面(As-B下面)9号溝

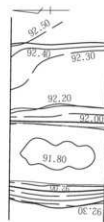


図65 21区2面(As-B混土層下面)10号溝



図66 43区2面(As-B下面)17号溝



III 遺物観察表

(4) 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物は、No8・9を除いて第1面(浅間A軽石
泥土層下面)調査時の表面採集品で近世に属す。No10は
浅間A軽石降下以降の畑耕作痕の基底面である基本土層
VI層上位からの出土で、この層の年代が17世紀の江戸時

代であることを示す。

No8・9は第2面からの出土で、No8は浅間B軽石直下の
水田の耕作土(基本土層X層)内から出土した。また、No
9は25区の基本土層XI層から出土したが、周辺の微高地
上における5世紀代の集落の存在を暗示する。

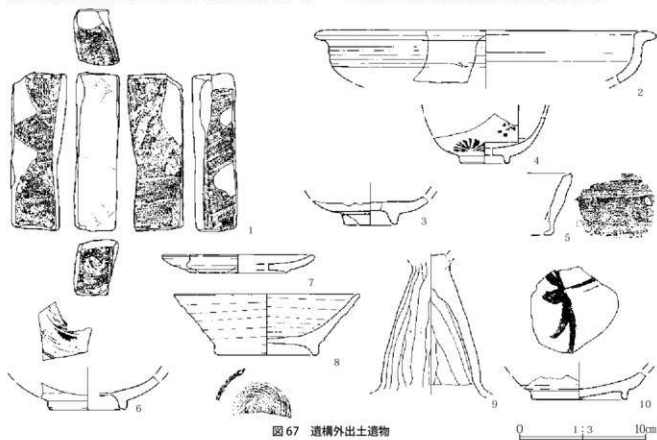


図 67 遺構外出土遺物

III 遺物観察表

遺構外出土遺物 (写真 PL.20)

3区1面	種別	法量 (cm)	①焼成 ②土質	②色調	成・整形技法の特徴 (器形・文様の特徴)	残存状態 備考
1	石製品 砥石	長さ12.5 幅3.6 残る。	厚さ4.4	①面は使用により中央部が大きく窪むが、他の3面は整形時の手押工具痕		両小口残存
2	瀬戸・美濃陶器 大皿	口径(9.0) 底一 高一	②灰白色		口縁部水平に近く外反。外面口縁部下3条の沈線。内外面灰釉。	体部破片 19世紀中頃
6区1面	3 肥前陶器 陶胎染付皿	口一 底(4.1) 高一	②灰白色		高台脇外面磨蝕。	底部破片 18世紀前半~中頃
4	瀬戸・美濃陶器 皿	口一 底(4.0) 高一	②灰白色		高台内に貫通しない亀裂があり、やや不良品。	底部~体部破片 19世紀中頃
7区1面	5 在地系土器 畑烙	口一 底一 高一	②灰白色		外面中位縞作り痕。	体部破片 江戸時代
6	製作地不詳陶器 皿か鉢	口一 底(6.0) 高一			内面白上刷毛塗り。内面から高台輪灰釉。	底部破片 時期不詳
7	瀬戸・美濃陶器 皿	口径(12.0) 底(7.5) 高1.4	②灰白色		志野丸皿。内面から高台内側長石釉。	底部~体部破片 17世紀後半
7区2面	8 須恵器 鉢	口径14.5 底8.4 高4.9	①還元 ②灰白色 ③細砂粒	外面 体部輪軸整形。底部右回転系切り。 内面 体部輪軸整形。		1/3 基本土層X層出土
25区2面	9 土師器 高坪	口一 底一 高(11.2)	①良好 ②棕色 ③細砂粒・角閃石	外面 脚部丁寧な履位削り。裾部横撫で。 内面 脚部履位指撫で。		脚部残存 基本土層XI層出土
31区1面	10 瀬戸・美濃陶器 鉄絵皿	口一 底7.6 高一	②灰白色		内面鉄絵具による蘭竹文。内面輪軸されるが、釉が薄く白濁。 脚付高台。	底部破片 17世紀

Ⅳ 調査の総括

岩押Ⅲ遺跡の浅間B軽石層下水田と条里地割

1. はじめに

岩押Ⅲ遺跡では、天仁元年(1108)の浅間山の噴火に伴う浅間B軽石(As-B)の直下から、平安時代後期の水田を検出した。道路の拡幅という事業上の性格から、南北方向の調査範囲が狭く、四方を畦で囲まれた一区画の水田の全てを検出した部分が皆無であったため、水田区画に関する資料を欠く。しかし一方で、東西方向についてはその延長が約600mにも及んだため、同じ浅間B軽石層直下の水田ではあるが、調査区によっていくつかの異なる水田面の状況を確認した。また、一部の地区においては下幅約2mの大畦を検出し、これらは古代の土地区画制度である一町(109m)四方を単位とする、条里地割に該当するものと想定された。

したがって、ここでは異なる状況の水田面の様相とこれから派生する体耕田の問題及び、1町(109m)間隔で配置されたと考えられる坪境の大畦について、それぞれ検討してみたい。

2. 3種類の異なる水田面の状況

本編中でも記したが、岩押Ⅲ遺跡における浅間B軽石層下水田は、調査区によって水田面及び畦畔の状況が微妙に異なり、厳密な区分はできないものの大きくは3種類の状況に分けられる。すなわち①水田面及び畦畔は平坦で、全体に風化が進んでいる調査区(写真1)、②水田面に小さな凹凸が存在し、畦の高さが比較的高い調査区(写真2)、③水田面及び畦畔の状況が①と②の中間的な様相の調査区(写真3)の3種類である。

①の水田面及び畦畔は平坦で、全体に風化が進んでいる調査区は、現道北側の4～6区(写真PL.4・5)、現道南側の26～31区(写真PL.12～14)で、全体の調査範囲では中央部10・34区付近の微高地より西半部の西側約100mほどの範囲である(図68)。

②の水田面に小さな凹凸が存在し、畦の高さが比較的高い調査区は、現道北側の14～16区(写真PL.9)、現道南側の37～40区(写真PL.17～19)で、全体の調査範囲では中央部10・34区付近の微高地より東半部の中央部約100mほどの範囲である。

③の水田面及び畦畔の状況が①と②の中間的な調査区は、現道北側の7～13区(写真PL.6～8)、18・19区(写



写真1 ①平坦で風化が進んだ水田面(5区)



写真2 ②小さな凹凸が存在する水田面(37区)



写真3 ③①と②の中間的な水田面(7区)

真PL.10)、現道南側の32～36区(写真PL.15～17)、41～43区(写真PL.19・20)で、全体の調査範囲では中央部10・34区付近の微高地を挟む約160mほどの範囲及び、調査範囲東側の約100mほどの範囲である。

前述のように、これらの水田面及び畦畔の状況は全ての調査区において明確に区分できる状況ではないが、少なくとも調査範囲の全てが同じ様相ではない。

IV 調査の総括

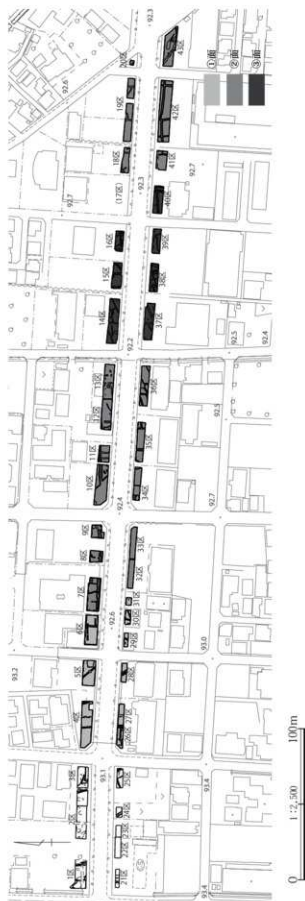


図68 岩押川遺跡浅間B軽石層下水田面状況図
(高崎市都市計画図に加筆)

一方、①～③の水田面における浅間B軽石層直下の耕作土(X層)について、イネのプラント・オパール分析を実施した結果、①の水田面及び畦畔は平坦で、全体に風化が進んでいる調査区に該当する6区では、5,700～8,300個/g、②の水田面に小さな凹凸が存在し、畦の高さが比較的高い調査区に該当する37区では、4,300～11,900個/g、③の水田面及び畦畔の状況が①と②の中間的な調査区に該当する7区では、8,300～13,200個/gとの値を得た(33頁「V-2・3岩押川遺跡におけるイネのプラント・オパール分析」参照)。これらの分析結果はいずれも高い数値を示すが、この数値からみてこれらが周囲のプラント・オパールを含む土壌からの移動によってもたらされた可能性は低く、この調査区において水田耕作が行われたことはほぼ確実であると考えられる。

以上のことから、①～③の水田面及び畦畔の風化度の違いは、水田耕作の終了から浅間B軽石の降下までの時間がそれぞれ異なることを示しているものと考えられる。つまり、この調査範囲の全てが浅間B軽石の降下時に水田として使用されていたのではなく、水田耕作の終了後は放置されていた部分が存在したものと判断ができよう。ひとつの考え方として、①は噴火の年に水田が長い期間放置されていた部分、②は噴火の年に水田耕作が行われた部分、③は噴火の年には①より短い期間の放置がされていた部分との想定も可能である。

この想定は、群馬県下における浅間B軽石層下水田の検討から休耕田の存在を指摘した、高井佳弘氏による見解(高井2006)と一致するものであると考えられる。さらに、先の①噴火の年に水田が長い期間放置されていた部分、③噴火の年には①より短い期間の放置がされていた部分の想定が正しいとすれば、休耕した期間は少なくとも半年ではなく、数年に及ぶ可能性も考えられよう。

なお、同様な水田面の状況の違いは、前橋南部拠点地区遺跡群No.5における浅間B軽石層下水田で、有山径世氏によって指摘されている(有山2010)。すなわち1ならかで、凹凸があってもごく浅い面、2高低差2～3cmほどの凹凸がある面、3高低差3～6cmほどの深い凹凸がある面の3種類である。これらは1が岩押川遺跡の①に、2が同③に、3が同②に相当するものと考えられることから、これらの現象は県下の異なる地域でも認められることになる。

3. 条里地割

岩押Ⅲ遺跡における浅間B軽石層下水田では、下幅50cm～1m、高さ数cmほどの小畦畔が一般的で、これらの多くの走行はこの地域の地形に即して、南西から北東の方向に大きく傾斜している。こうしたなかで、6～11区及び35・38区においては、下幅2.0m、高さ10cmの畦を検出し、これらの規模は遺跡内において突出したものである。さらに、これらの走行は一般的な小畦が南西から北東の方向に大きく傾斜しているのに対して、ほぼ東西・南北の方向に走行し、一般的な小畦の走行とは方向を異にしている。ここではこれらの大畦を概観し、その地割について検討してみたい。

東西方向の7区大畦は上幅1.5m、下幅2.0m、高さ10cmで、走行はN-89°-Eである(図69)。西側に隣接する6区及

び東側の8・9区まで連続して認められるが、9区で畦の高まりはほぼ消滅する。次に10区の大畦は上幅1.3m、下幅2.2m、高さ5cm、走行はN-89°-Eで(図70)、東側の11・12区まで連続して認められる。

一方、南北方向の35区の大畦は上幅1.0m、下幅1.8m、高さ10cmで、走行はN-1°-Wである(図71)。次に38区の大畦は上幅1.0m、下幅1.8m、高さ10cmで、走行はN-1°-Wである(図72)。

これらの大畦のうち、南北方向の35区大畦と38区大畦は、それぞれ軸線の方向が真北に対して西側に約1°傾く走行がほぼ平行し、その芯心間隔は約109mである。一方、東西方向の7区大畦を含む6区～12区については、一部にその末端同士を結んだ直線から僅かにずれる箇所が認められるものの、ほぼ一直線上に位置する。さ

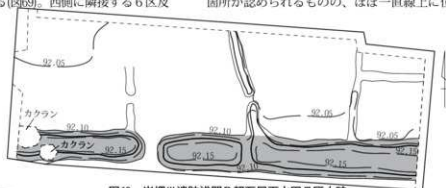


図69 岩押Ⅲ遺跡浅間B軽石層下水田7区大畦

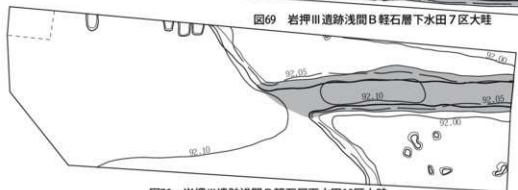


図70 岩押Ⅲ遺跡浅間B軽石層下水田10区大畦

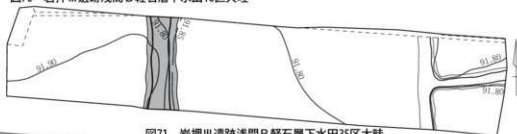


図71 岩押Ⅲ遺跡浅間B軽石層下水田35区大畦

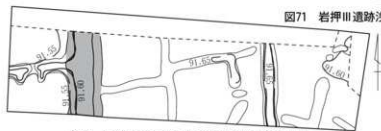


図72 岩押Ⅲ遺跡浅間B軽石層下水田38区大畦

0 1:200 5m

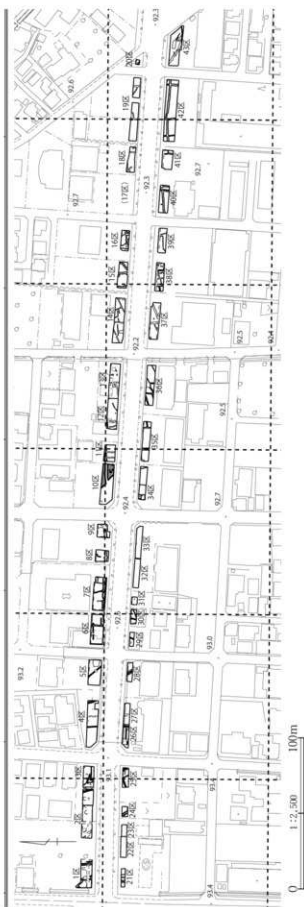


図73 岩押Ⅲ遺跡浅間B軽石層下水田条里地割想定図
(高崎市都市計画図に加筆)

らにこの末端同士を結んだ直線の傾きは、真北方向に直交する東西方向の軸線に対して西側に約1°傾いていることから、先の南北方向の大畦の軸線に対してほぼ直交していることになる。したがって、これらの大畦は一町(109m)を単位とする条里地割の坪境の畦と考えられる。

これらの大畦を基軸として遺跡内に109m間隔で枠を組むと、東側では19・42区の南北方向の畦が軸線上に位置することになる(図73)。これらの畦はいずれも下幅80cm～1.0mで大畦ではないが、前橋南部拠点地区遺跡群No5においても幅70cm～80cmの坪境の畦が存在することから※1、これらも条里地割である可能性が高い。一方、35区より西側については、該当する畦が見当たらない。

特徴的なのは、9区から10区にかけての東西方向の大畦である。両調査区の地形は、9区が低地部を呈するのに対して10区の西側は微高地で、その西側の境は両調査区の間現道部分にあると考えられる。つまり、9区から10区にかけての間には微高地が存在し、10区の大畦は微高地を挟んでほぼ直線上に位置しているのである。これは、条里地割による水田化がこの遺跡の全ての範囲について行われたのではなく、地形の状況に合わせた水田化が行われたことを示している。

4. まとめ

以上、岩押Ⅲ遺跡における浅間B軽石層下水田の異なる水田面の状況から、数年に及ぶ可能性のある休耕田の存在と、検出した大畦からこの遺跡内における条里地割の可能性をそれぞれ検討した。しかし、各調査区の範囲が狭いことから、いずれの問題も今後の隣接地及び周辺地域における検証を必要とする。また、今回は検討することができなかった水田耕作土及び、この層の下位に位置する水田耕作土の問題も含めて、岩押Ⅲ遺跡における平安時代水田についての今後の課題としたい。

本稿の作成にあたっては、有山径世氏、安生素明氏、高井佳弘氏から有益なご助言を賜った。文末ながら、記して感謝の意を表す次第である。

※1 南部拠点地区遺跡群No5の発掘調査及び報告書作成を担当された、有山径世氏からご教示を頂いた。

引用・参考文献

- 有山径世 2010 「As-B層下水田面の状態」『南部拠点地区遺跡群No5』
前橋市教育委員会
高井佳弘 2006 「平安時代後期水田耕作の一様相―群馬県内浅間B軽石下水田の検討から―」『生業の考古学』同人社

V 自然科学分析

岩押Ⅲ遺跡では、基本土層のいくつかの層において不明なテフラ粒子が認められた。また、基本土層中にはいくつかの低地性の堆積物が存在し、これらは水田耕作土である可能性が考えられた。したがって、これらの層位の年代とその性格を明らかにすべく、株式会社古環境研究所にこれらの分析を委託した。分析結果は、以下のとおりである。

1 岩押Ⅲ遺跡におけるテフラ分析

(1) 土層の層序

37区北壁では、下位より黒泥層(層厚6cm)、粗粒火山灰を少量含む黒泥層(層厚2cm, 以上7層)、灰色粘質土(層厚9cm, 6層)、黒灰色粘質土(層厚5cm, 5層)、成層したテフラ層(層厚8cm, 4層)、円磨した粗粒の白色軽石を含む黒褐色砂質土(層厚3cm, 軽石の最大径48mm, 3層)、灰褐色土(層厚10cm, 2層)、鉄分を多く含む黄色土(層厚4cm)、鉄分を比較的多く含む灰色がかった黄色土(層厚7cm, 以上1層)、灰色土(層厚7cm)、暗灰色土ブロック混じり灰色土(層厚8cm)、灰色土(層厚6cm)、鉄分を含む黄灰色土(層厚9cm)、角礫混じり灰褐色土(層厚36cm, 礫の最大径67mm, 道路盛土)が認められる(図74)。これらのうち、成層したテフラ層は、下位よりやや粗粒の褐色軽石を含む灰褐色粗粒火山灰層(層厚3cm, 軽石の最大径8mm)、橙褐色粗粒火山灰層(層厚2cm)、やや黄色がかった灰色粗粒火山灰層(層厚3cm)からなる。発掘調査では、このテフラ層直下から水田と推定される遺構が検出されている。

(2) テフラ検出分析

a 分析試料と分析方法

37区北壁で採取されたT8～T1の8試料を対象にテフラ検出分析を行い、テフラ層に含まれるテフラ粒子の岩相を記載するとともに、指標テフラの降層層準を求めた。分析の手順は次のとおりである。

1) 試料12gについて超音波洗浄により泥分を除去。

2) 80℃で恒温乾燥。

3) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。

b 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。分析対象試料のうち、試料T8およびT7には、スポンジ状に良く発泡した細粒の灰白色軽石(最大径2.3mm)が少量含まれている。これらの試料には、その細粒物である灰白色軽石型ガラスが含まれており、比較的多く含まれている。その斑品には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。

この軽石型ガラスはT3にかけて認められるが、T6からT4にかけては、ほかにスポンジ状の白色軽石型ガラスもごく少量含まれている。これらの3試料では、わずかながら角閃石も認められる。成層したテフラ層の下部から採取されたT2には、比較的良好に発泡した淡褐色軽石(最大径5.9mm)やその細粒物である淡褐色の軽石型ガラスがとくに多く含まれている。その斑品には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。

T1には、スポンジ状などによく発泡した白色の軽石(最大径3.8mm)やその細粒物である白色の軽石型ガラスが比較的多く含まれている。これらの中には光沢をもつものも認められる。その斑品には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。

以上のように、テフラ検出分析では大きく区分して4種類のテフラ粒子を認めることができた。

(3) 屈折率測定

a 測定試料と測定方法

指標テフラとの同定精度を向上させるために、37区北壁において特徴的なテフラ粒子が認められた試料のうち、T8～T6およびT4の4点に含まれる火山ガラスの屈折率を測定した。測定の対象は、T8およびT7については軽石を実体顕微鏡下で選別し軽く粉砕したもの、またT6およびT4については分析篩により篩別した1/8-1/16mmの粒子中の火山ガラスである。測定には、温度変化型屈折率測定装置(古澤地質社製MA10T)を利用した。

b 測定結果

屈折率測定の結果を表2に示す。T8に含まれる火山ガラス(27粒子)の屈折率(n)は、1.514-1.517である。T7に含まれる火山ガラス(30粒子)の屈折率(n)は、1.514-1.520である。T6に含まれる火山ガラス(22粒子)の屈折率(n)は、1.500-1.508

である。T4に含まれる火山ガラス(17粒子)の屈折率はtri-modalで、1.498(1粒子)、1.500-1.502(12粒子)、1.516-1.518(4粒子)の値が得られた。

(4) 考察

特徴的なテフラ粒子が比較的多く検出された試料のうち、T8およびT7(層)に含まれる灰白色の軽石は、岩相や火山ガラスの屈折率などから、4世紀初頭に浅間火山から噴出したと推定されている浅間C軽石(As-C、荒牧、1968、新井、1979、友廣、1988、若狭、2000)に由来すると考えられる。したがって、このタイプの軽石の細粒物である灰白色軽石型ガラスについてもAs-Cに由来すると推定される。

その上位にある、T6～T4(6～5層)にAs-C起源の軽石型ガラスのほか少量含まれている白色の軽石型ガラスや角閃石は、層位、火山ガラスの屈折率、角閃石の存在などから、6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳波川テフラ(Ⅱr-FA、新井、1979、坂口、1986、早田、1989、町田・新井、1992)あるいはそれに関係した火山泥流堆積物(早田、1989)、さらに6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ(Ⅱr-FP、新井、1979、坂口、1986、早田、1989、町田・新井、1992)に由来すると推定される。

T2が採取されたテフラ層(4層)は、層相や軽石や火山ガラスの岩相などから、1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B、荒牧、1968、新井、1979)に同定される。したがって、発掘調査で検出された水田面は、As-Bにより覆われていると考えられる。

T1に含まれるテフラ粒子のうち、白色の軽石や軽石型火山ガラスのほとんどは、それらの層位、岩相、測定された一部の火山ガラスの屈折率特性(n : 1.516-1.518)などから、1783(天明3)年に浅間火山から噴出した浅間A軽石(As-A)に由来すると考えられる。なお、屈折率(n)が1.500-1.502の火山ガラスについては、上述の6世紀の榛名火山起源のテフラ、約1.5～1.65万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石(As-YP、新井、1962、町田・新井、1992、2003など)や、As-YPの噴火の後に流下した浅間火山に属する火山泥流堆積物(早田、1990、中村、2003など)に由来する可能性がある。また、屈折率(n)が1.498の火山ガラスについては、約2.8～3万年前に南九州の始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰(AT、町田・新井、1976、2003、松本ほか、1987、村山ほか、1993、池田ほか、1995など)に由来するのかも知れない。もちろん、これらのテフラについては、二次的に堆積したもので本来の堆積層準を示すものではない。

(5) まとめ

岩相Ⅲ遺跡において、地質調査、テフラ検出分析、火山ガラスの屈折率測定を実施した。その結果、下位より浅間C軽石(As-C、4世紀初頭)、榛名二ツ岳波川テフラ(Ⅱr-FA、6世紀初頭)あるいはⅡr-FAや榛名二ツ岳伊香保テフラ(Ⅱr-FP、6世紀中葉)に属する火山泥流堆積物、浅間Bテフラ(As-B、1108年)、浅間A軽石(As-A、1783年)などのテフラ層やテフラ粒子を検出することができた。発掘調査で検出された水田と推定される遺構は、As-Bにより埋没したと推定される。

文献

- 新井房夫 1962 関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
 新井房夫 1979 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル, no.157, p.41-52.
 荒牧重雄 1968 浅間火山の地質。地質研報, no.45, 65p.
 池田晃久・奥野 充・中村俊夫・岡井正明・小林哲夫 1995 南九州、始良カルデラ起源の大噴降軽石と入戸大砕砕中の炭化樹木の加速重質分析法による ^{14}C 年代。第四紀研究, 34, p.377-379.
 町田 洋・新井房夫 1976 広域に分布する火山灰-始良Tn火山灰の発見とその意義。科学, 46, p.339-347.
 町田 洋・新井房夫 1992 火山灰トラス。東京大学出版会, 276p.
 町田 洋・新井房夫 2003 新編火山灰トラス。東京大学出版会, 336p.
 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗 1987 始良Tn火山灰(AT)の ^{14}C 年代。第四紀研究, 26, p.79-83.
 村山隆史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 朝彦 1993 西園沖ピストンコア試料を用いたAT火山灰噴出年代の再検討-タンデロン加速重質分析法による浮遊性有孔虫の ^{14}C 年代。地質雑報, 99, p.787-798.
 中村正芳 2003 高崎の台地をつくる地層。高崎市史編さん委員会編「高崎市史通史編1 原始古代」, p.55-101.
 坂口 一 1986 榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器。群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.
 早田 勉 1989 6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害。第四紀研究, 27, p.297-312.
 早田 勉 1990 群馬県の自然と風土。群馬県史編さん委員会編「群馬県史通史編1 原始古代1」, p.37-129.
 友廣哲也 1988 古式土師器出現期の様相と浅間山C軽石。群馬県埋蔵文化財調査事業団編「群馬の考古学」, p.325-336.
 若狭 徹 2000 群馬の赤土器が終わるとき。かみつけの聖博物館編「人が動く・土器も動く-古墳が成立する頃の土器の交流」, p.41-43.

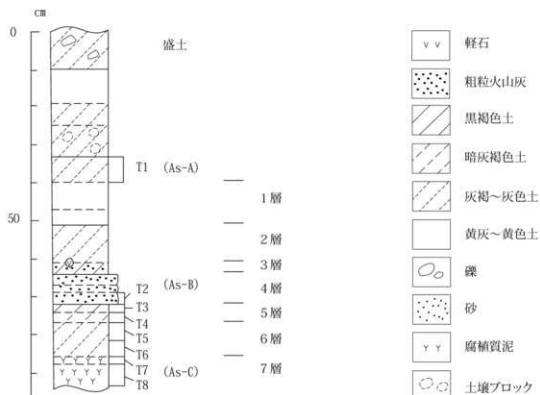


図 74 岩押Ⅲ遺跡 37区北壁の土層柱状図

表 1 テフラ検出分析・屈折率測定結果

地点	試料	軽石・スコリア		火山ガラス		火山ガラス屈折率 (n)	測定粒子		
		量	色調 最大径	量	形態 色調				
37区北壁	T1	**	白～淡褐 3.8, 2.3	**	pm 白, 淡褐	1.498-1.500-1.502-1.516-1.518	1,12.4		
	T2	***	淡褐 5.9	****	pm 淡褐				
	T3			*	pm 灰白				
	T4			**	pm 灰白, 白				
	T5			**	pm 灰白, 白				
	T6			**	pm 灰白, 白				
	T7	*	灰白 2.1	**	pm 灰白			1.500-1.508	22
	T8	*	灰白 2.3	*	pm 灰白			1.514-1.520 1.514-1.517	30 27

***: 特に多い, ***: 多い, **: 中程度, *: 少ない. 最大径の単位は mm. bw: パブル型, pm: 軽石型. 屈折率測定は温度変化型屈折率測定装置 (MAOT)

2 岩押Ⅲ遺跡におけるプラント・オパール分析(1)

(1) 試料

分析対象試料は、1区、3区、6区、7区から採取された合計23点である。

(2) 分析法

プラント・オパール分析は、ガラスビーズ法(藤原, 1976)を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)。
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μmのガラスビーズを約0.02g添加(電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)。
- 3) 電気炉灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理。
- 4) 超音波水中照射(300W・42kHz・10分間)による分散。
- 5) 沈底法による20 μm以下の微粒子を除去。
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成。
- 7) 検鏡・計数。

V 自然科学分析

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールを対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10-5 g)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間占有割合などを具体的にとらえることができる(杉山, 2000)。

(3) 分析結果

水田跡(稲作跡)の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ムギ類(穎の表皮細胞)、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科の主要な6分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図75に示した。

(4) 考察

a 水田作土の可能性について

水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している(杉山, 2000)。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

1区の2試料でのイネのプラント・オパール検出密度は8,100 ~ 10,300個/gで、いずれも水田作土の可能性が高い。3区の7試料については、イネのプラント・オパール検出密度が1,500個/gの試料7をのぞけば、それは3,000 ~ 16,100個/gで水田作土の可能性が高い。その中では、試料5が3,000個/gでやや検出密度が低い。ほかの2試料におけるイネのプラント・オパール検出密度は6,500 ~ 8,000個/gで、いずれも水田作土の可能性が高いと考えられる。6区の4試料のイネのプラント・オパール検出密度は5,700 ~ 8,300個/gで、いずれも水田作土の可能性が高いと考えられる。

7区の10試料では、いずれの試料からも高密度でイネのプラント・オパールが検出された。その検出密度は、8,300 ~ 14,200個/gである。10区の試料1でも、イネのプラント・オパール検出密度が14,100個/gと高い値が得られた。したがって、これらの試料の採取層準でも水田耕作が行われた可能性が高い。

なお、イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったことなどが考えられる。

b その他の植物について

3区の試料2および試料1からは、ムギの類(穎の表皮細胞)のプラント・オパールが検出された。その検出密度は1,500 ~ 2,100個/gである。また、3区の試料1、6区の4試料、7区の10試料からは、ヒエ属型のプラント・オパールが検出された。それぞれのプラント・オパール検出密度は700個/g、600個/g、700 ~ 1,400個/g、700 ~ 2,000個/gである。これらのうち、とくに7区の試料6でその密度が高い。

また、ほかに、いずれの試料からもヨシ属、ススキ属型、タケ亜科のプラント・オパールが検出された。ヨシ属に關しては、7区においてその検出密度および推定生産量で大きな値が得られた。

(5) まとめ

岩押Ⅲ遺跡の1区、3区、6区、7区において採取された23試料についてプラント・オパール分析を実施した結果、5区の試料3をのぞいてイネのプラント・オパールが検出され、いずれも試料採取層準で稲作が行われていた可能性が高いと判断された。

文献

杉山真二 2000 植物珪酸体(プラント・オパール)。考古学と植物学、同成社、p.189-213。

藤原宏志 1976 プラント・オパール分析法の基礎的研究(Ⅰ)―数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法―。考古学と自然科学、9、p.15-29。

藤原宏志・杉山真二 1984 プラント・オパール分析法の基礎的研究(Ⅱ)―プラント・オパール分析による水田跡の探査―。考古学と自然科学、17、p.73-85。

3 岩押Ⅲ遺跡におけるプラント・オパール分析(2)

(1) 試料

分析試料は、37区北壁の土層断面から採取された8点およびAs-B直下検出面(37区北壁東部)から採取された8点の合計16点である。前者の試料採取層位を分析結果図76に示す。

(2) 分析法

「2 岩押Ⅲ遺跡におけるプラント・オパール分析(1)」に同じ。

(3) 分析結果

プラント・オパール分析では、イネ、ムギ類(穎の表皮細胞)、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科の主要な6分類群について同定・定量を行っている。分析結果を表2および図77に示した。

(4) 考察

a 水田跡(稲作跡)の検討

水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している(杉山, 2000)。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

37区北壁

As-Bより上位のP1から下位のP8までの層位について分析を行った。その結果、これらのすべての試料からイネが検出された。このうち、As-Bより上位のP1～P3およびAs-Bより下位の試料P5～P7では密度が5,000個/g以上と高い値であり、P8でも4,200個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層位では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。ただし、As-B直上のP4では密度が2,800個/gで比較的低く、ピークのP7(6層)からP4(3層)にかけて次第に密度が低くなり、その反対にヨシ属の密度が高くなる傾向にあることに注意する必要がある。

イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、さらに上層や他所からの混入などが考えられる。

As-B直下検出面(37区北壁東部)

P9～P16の8試料について分析を行った。その結果、これらのすべての試料から最低でも4,300個/gのイネが検出された。このうち、P9、P10、P12、P14～P16の6試料では密度が5,000個/g以上と高い値であり、P11とP13の2試料でも4,300個/gと比較的高い値である。したがって、これらの地点では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

b 堆積環境の推定

ヨシ属は湿地的なところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育している。このことから、これらの植物の出現状況を検討することによって、堆積当時の環境(乾燥・湿潤)を推定することができる。

イネ以外の分類群では、下位層位を中心にヨシ属が多く検出され、ススキ属型やタケ亜科は比較的少量である。おもな分類群の推定生産量によると、As-Bより下位ではヨシ属が優勢であり、とくにAs-B直下層および下位のP8で多くなっている。以上のことから、本遺跡周辺はヨシ属が生育するような湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。なお、イネとヨシ属が共伴していることから、水田雑草などとしてヨシ属が生育していたことや、休閑期間中にヨシ属が繁茂していたこと、施肥などの目的でヨシ属が水田内に持ち込まれたことなどが想定される。

(5) まとめ

プラント・オパール分析の結果、水田遺構が検出されたAs-B直下層ではイネが多量に検出され、同層で稲作が行われていたことが分析的に検証された。また、As-Bの下位層や上位層でもイネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。本遺跡周辺は、ヨシ属が生育するような湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。

文献

- 杉山真二 2000 植物珪酸体(プラント・オパール)。考古学と植物学。同成社。p.189-213。
藤原宏志 1976 プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)―数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法―。考古学と自然科学。9。p.15-29。
藤原宏志・杉山真二 1984 プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)―プラント・オパール分析による水田跡の探査―。考古学と自然科学。17。p.73-85。

表1

地点・試料		検出密度 (単位: ×100個/g)												
分類群	学名	1区		3区						6区				
		3	4	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4
イネ	<i>Oryza sativa</i>	81	103	161	136	105	124	30	59	15	57	60	83	83
ムギ類 (穎の表皮細胞)	<i>Hordeum-Triticum</i>			15	21									
ヒエ属型	<i>Echinochloa type</i>		7								14	7	8	8
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	7	52	15	14	14	7	23	52	15	50	45	45	38
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	29	15	15	57	28	21	8	39	53	21	45	23	23
タケ亜科	<i>Bambusoideae</i>	44	44	66	143	70	62	15	20	23	36	37	30	23

地点・試料		7区									
分類群	学名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
		イネ	<i>Oryza sativa</i>	88	96	119	83	132	112	117	113
ムギ類 (穎の表皮細胞)	<i>Hordeum-Triticum</i>										
ヒエ属型	<i>Echinochloa type</i>	14	7	15	8	7	20	7	7	7	7
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	95	103	60	53	95	40	73	66	77	52
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	14	27	15	45	37	20	22	20	42	22
タケ亜科	<i>Bambusoideae</i>	54	27	15	53	44	33	44	73	42	37

表2

地点・試料		37区北壁								As-B下検出面(37区北壁東部)							
分類群	学名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
		イネ	<i>Oryza sativa</i>	124	50	84	28	50	95	102	42	81	57	43	65	43	51
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	13	35	35	28	93	75	47	155	44	21	79	43	57	58	70	70
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	33	21	7	42	7	27	27	42	37	35	36	72	50	58	56	49
タケ亜科	<i>Bambusoideae</i>	72	64	84	14	93	41	7	21	52	64	29	29	57	22	42	42

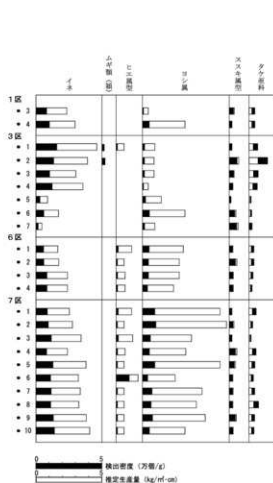


図75 岩押川遺跡 プラント・オパール分析結果 (1)

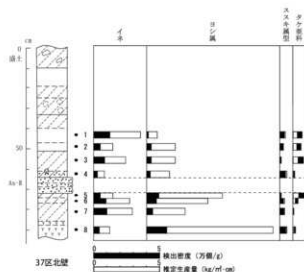


図76 岩押川遺跡 プラント・オパール分析結果 (2)1

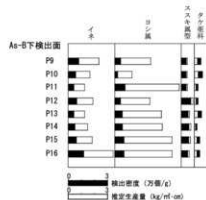


図77 岩押川遺跡 プラント・オパール分析結果 (2)2

写真図版



▲ 岩押田遺跡遠景（南東上空から望む）

岩押田遺跡は、約1万年前の高崎泥流によって形成された高崎台地と呼ばれる平坦地上に立地する。市街化が進んだ現在、ここに古代の景観を想像することは難しい。しかし、平安時代にはJR高崎駅（写真中央）から環状線（写真右下）の間の東口線沿線は、一部の微高地を除くほぼ全域に整然と区画された水田が営まれていた。



▲ 岩押田遺跡遠景（高崎駅東口線 東方上空から望む）





1区1面 (As-A混土層下面) 全景 (東から)



1区1面 (As-A混土層下面) 全景 (南東から)



1区1面 (As-A混土層下面) 復旧溝 (南から)



1区1面 (As-A混土層下面) 復旧溝土層SPB (南から)



1区2面 (As-B混土層下面) 全景 (北西から)



1区2面 (As-B混土層下面) 全景 (南東から)



1区2面 (As-B混土層下面) 3・2号溝 (南から)



1区2面 (As-B混土層下面) 2・3号溝土層SPC (北から)



1区土層SPA (南西から)



1区東半部擾乱状況



2区2面 (As-B混土層下面) 全景 (東から)



2区2面 (As-B混土層下面) 全景 (西から)



3区1面 (As-A混土層下面) 全景 (東から)



3区2面 (As-B混土層下面) 全景 (東から)



3区2面 (As-B混土層下面) 全景 (西から)



3区土層SPA (北から)



4区2面 (As-B下面) 西半 全景 (東から)



4区2面 (As-B下面) 西半 畦 (南から)



4区2面 (As-B下面) 東半 全景 (西から)



4区2面 (As-B下面) 東半 用水路 (南から)



5区1面 (As-A混土層下面) 全景 (西から)



5区1面 (As-A混土層下面) 畑耕作痕 (南から)



5区1面 (As-A混土層下面) 畑耕作痕土層 (南から)



5区2面 (As-B下面) 全景 (西から)



5区2面 (As-B下面) 桩 (南東から)



5区土層SPA (南から)



6区1面 (As-A混土層下面) 全景 (東から)



6区1面 (As-A混土層下面) 畑耕作痕 (南東から)



6区2面 (As-B下面) 全景 (東から)



6区土層SPC (北から)



7区1面 (As-A混土層下面) 全景 (西から)



7区1面 (As-A混土層下面) 復旧土坑・畑耕作痕土層SPA (南から)



7区2面 (As-B下面) 全景 (東から)



7区2面 (As-B下面) 全景 (北西から)



8区1面 (As-A混土層下面) 全景 (東から)



8区1面 (As-A混土層下面) 畑耕作痕 (南から)



8区2面 (As-B下面) 全景 (東から)



8区土層SPA (南東から)



9区1面 (As-A混土層下面) 全景 (西から)



9区1面 (As-A混土層下面) 畑耕作痕 (南から)



9区2面 (As-B下面) 全景 (東から)



9区2面 (As-B下面) 大柱土層SPB (南東から)



10区2面 (As-B下面) 全景 (東から)



10区2面 (As-B下面) 全景 (西から)



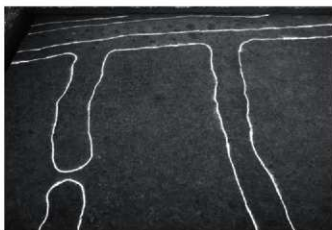
10区土層SPA (南から)



10区土層SPA (南から)



11区2面 (As-B下面) 全景 (東から)



11区2面 (As-B下面) 畦 (南から)



12区2面 (As-B下面) 全景 (東から)



12区2面 (As-B下面) 全景 (西から)



12区2面 (As-B下面) 畦 (南から)



12区土層SPA (南から)



13区2面 (As-B下面) 全景 (東から)



13区2面 (As-B下面) 畦 (南東から)



14区1面 (As-A混土層下面) 西半 全景 (西から)



14区1面 (As-A混土層下面) 復旧土坑土層SPC (北から)



14区 2面 (As-B下面) 西半 全景 (東から)



14区 2面 (As-B下面) 東半 全景 (西から)



15区 2面 (As-B下面) 西半 全景 (東から)



15区 西半土層SPB (南から)



15区 2面 (As-B下面) 東半 全景 (東から)



15区 2面 (As-B下面) 東半 全景 (西から)



16区 2面 (As-B下面) 全景 (東から)



16区 2面 (As-B下面) 全景 (西から)



18区2面 (As-B下面) 西半 全景 (東から)



18区2面 (As-B下面) 東半 全景 (西から)



19区2面 (As-B下面) 西半 全景 (西から)



19区2面 (As-B下面) 西半 畦 (南から)



19区2面 (As-B下面) 中央 全景 (東から)



19区2面 (As-B下面) 東半 全景 (東から)



20区2面 (As-B下面) 全景 (東から)



20区2面 (As-B下面) 土層SPB (東から)



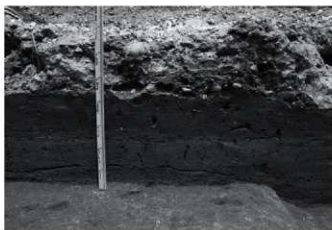
21区2面 (As-B・B混土層下面) 全景 (東から)



21区2面 (As-B・B混土層下面) 用水路 (南東から)



21区2面 (As-B・B混土層下面) 用水路土層SPA (南から)



21区2面 (As-B・B混土層下面) 土層SPA (南から)



22区攪乱状況 (東から)



23区攪乱状況 (北東から)



24区2面 (As-B・B混土層下面) 全景 (東から)



24区2面 (As-B・B混土層下面) 用水路 (西から)



24区2面 (As-B・B混土層下面) 用水路 (南東から)



24区2面 (As-B・B混土層下面) 用水路土層SPA (北から)



25区2面 (As-B・B混土層下面) 全景 (東から)



25区2面 (As-B・B混土層下面) 全景 (東から)



25区2面 (As-B・B混土層下面) 中央部 (南東から)



25区土層SPA (南西から)



26区2面 (As-B下面) 全景 (東から)



26区土層SPA (南から)



27区 2面 (As-B下面) 全景 (東から)



27区 2面 (As-B下面) 全景 (西から)



28区 2面 (As-B下面) 全景 (西から)



28区 2面 (As-B下面) 用水路 (南東から)



29区 1面 (As-A混土層下面) 全景 (東から)



29区 1面 (As-A混土層下面) 全景 (西から)



29区 2面 (As-B下面) 全景 (東から)



29区土層SPB (東から)



30区1面 (As-A混土層下面) 全景 (西から)



30区1面 (As-A混土層下面) 畑耕作痕 (南から)



30区1面 (As-A混土層下面) 畑耕作痕土層SPA (南から)



30区2面 (As-B下面) 全景 (東から)



31区1面 (As-A混土層下面) 全景 (西から)



31区1面 (As-A混土層下面) 畑耕作痕検出状況 (西から)



31区2面 (As-B下面) 全景 (西から)



31区2面 (As-B下面) 人足跡 (東から)



32区1面 (As-A混土層下面) 全景 (東から)



32区2面 (As-B下面) 全景 (東から)



32区2面 (As-B下面) 畦 (東から)



32区土層SPA (南から)



33区1面 (As-A混土層下面) 全景 (東から)



33区2面 (As-B下面) 全景 (東から)



34区1面 (As-A混土層下面) 西半 全景 (東から)



34区1面 (As-A混土層下面) 西半 復旧土坑 (南から)



34区2面 (As-B・B混土層下面) 西半 全景 (東から)



34区2面 (As-B・B混土層下面) 東半 全景 (西から)



34区西半西端部土層SPA (南から)



34区東半東端部土層SPC (南西から)



35区2面 (As-B下面) 西半 全景 (東から)



35区2面 (As-B下面) 西半 大畦 (南から)



35区2面 (As-B下面) 東半 全景 (西から)



35区2面 (As-B下面) 東半 畦 (南から)



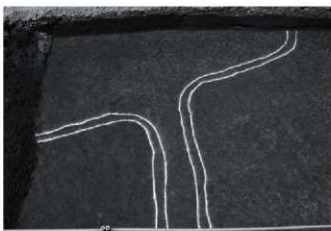
36区2面 (As-B下面) 西半 全景 (東から)



36区2面 (As-B下面) 西半 全景 (西から)



36区2面 (As-B下面) 東半 全景 (西から)



36区2面 (As-B下面) 東半 畦 (南から)



37区2面 (As-B下面) 全景 (東から)



37区2面 (As-B下面) 全景 (西から)



37区2面 (As-B下面) 畦 (南から)



37区土層SPA (南から)



38区2面 (As-B下面) 全景 (西から)



38区2面 (As-B下面) 大畦 (東から)



38区2面 (As-B下面) 全景 (南東から)



38区2面 (As-B下面) 大畦 (南から)



39区2面 (As-B下面) 全景 (西から)



39区2面 (As-B下面) 畦 (南から)



40区2面 (As-B下面) 全景 (東から)



40区2面 (As-B下面) 全景 (南東から)



40区2面 (As-B下面) 畦・用水路 (南から)



40区2面 (As-B下面) 畦・用水路 (南から)



41区2面 (As-B下面) 全景 (西から)



41区2面 (As-B下面) 畦 (南から)



42区2面 (As-B下面) 西半 全景 (東から)



42区2面 (As-B下面) 西半 全景 (西から)



42区2面 (As-B下面) 東半 全景 (西から)



42区2面 (As-B下面) 東半 全景 (東から)



43区2面 (As-B下面) 西半 全景 (東から)



43区2面 (As-B下面) 東半 全景 (東から)



1



2



5



3



4



6



8



7



7



9



7



10

報告書抄録

書名ふりがな	いわおしさんいせき
書名	岩押Ⅲ遺跡
副書名	(都) 3.3.8高崎駅東口線社会資本整備総合交付金(活力基盤)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	520
編著者名	坂口 一
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	2011年3月18日
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北碓町下箱田784-2
遺跡名ふりがな	いわおしさんいせき
遺跡名	岩押Ⅲ遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんたかさきしいわおしまち・かみなかいまち
遺跡所在地	群馬県高崎市岩押町・上中居町
市町村コード	10202
遺跡番号	02695
北緯(日本測地系)	36° 19' 08"
東経(日本測地系)	139° 01' 32"
北緯(世界測地系)	36° 19' 19"
東経(世界測地系)	139° 01' 21"
調査期間	2009年04月01日～2009年06月30日 / 2010年01月01日～2010年03月31日 / 2010年04月01日～2010年05月31日
調査面積	8,427㎡
調査原因	道路建設
種別	水田・畑
主な時代	平安・江戸
遺跡概要	水田－平安時代1面 / 溝17－畑－江戸時代1面
特記事項	天仁元年(1108)降下の浅間B軽石層直下水田の一部で確認した大甕が、条里制の規格に基づいて配置された坪境の甕である可能性が高く、これはこの周辺地域における初の調査例。
要約	高崎台地上の低地部における天仁元年(1108)降下の浅間B軽石層(As-B)直下水田と、天明三年(1783)降下の浅間A軽石(As-A)を除去した復旧土坑・復旧溝及び、浅間A軽石降下以降の畑耕作痕の調査。

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第520集

岩 押 Ⅲ 遺 跡

(都)3.3.8高崎駅東口線社会資本整備総合交付金(活力基盤)
事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成23年(2011)3月11日 印刷
平成23年(2011)3月18日 発行

編集・発行/財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

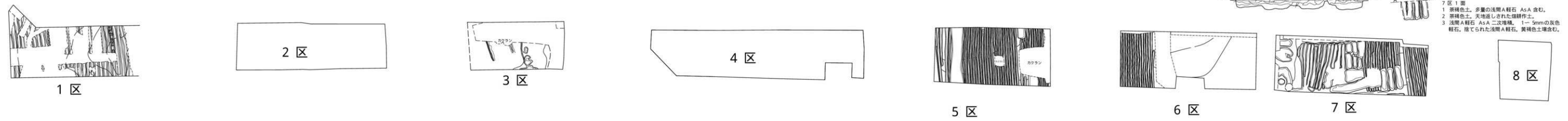
〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2

電話 (0279) 52-2511 (代表)

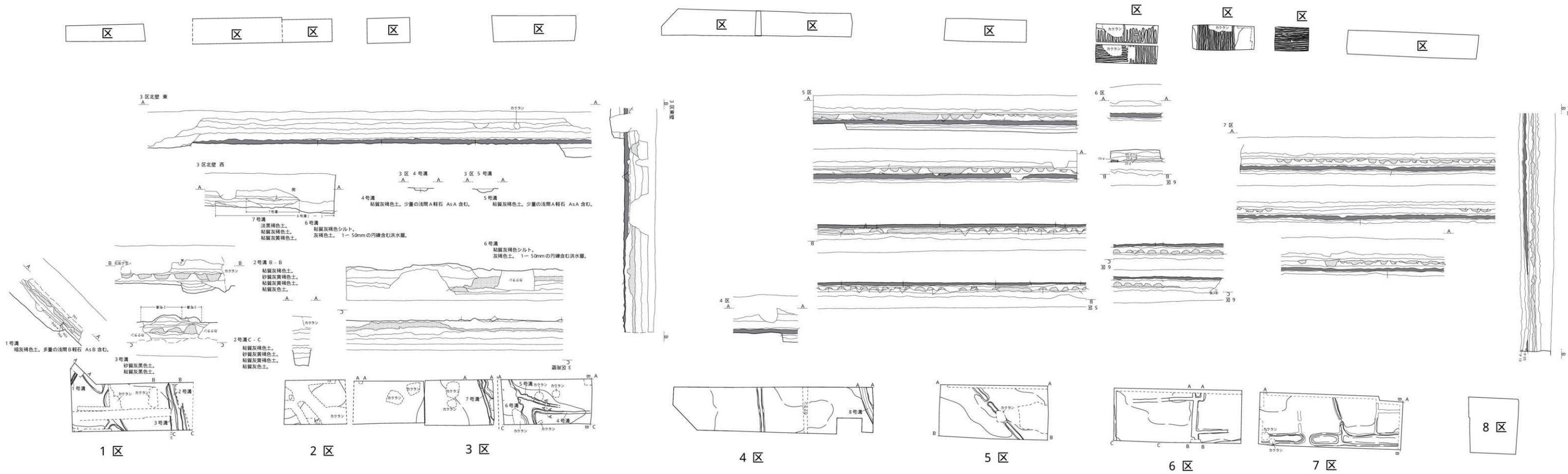
ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷/杉浦印刷株式会社

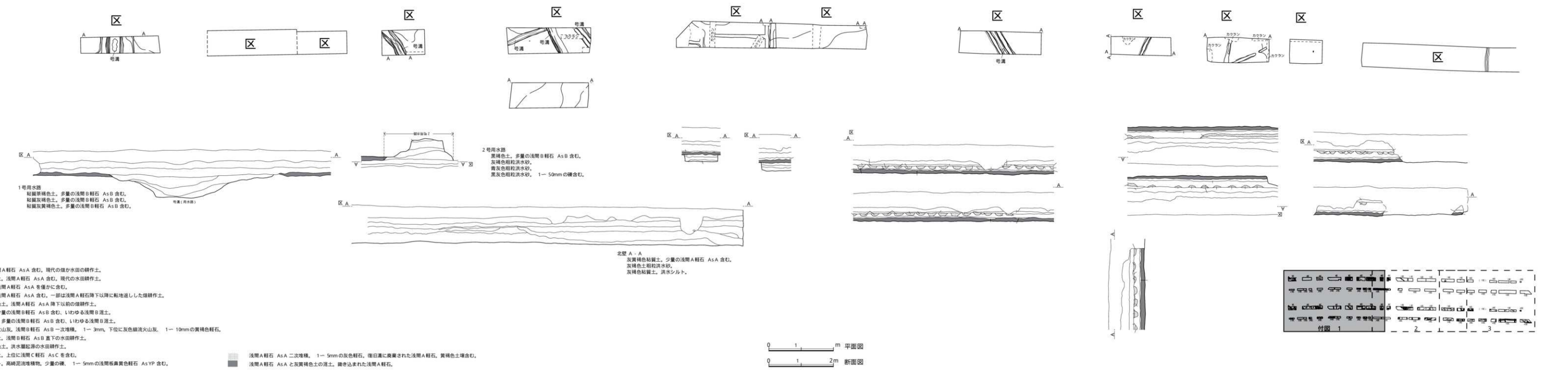
付図 1 岩押 遺跡 第1・2面 遺構平・断面図 1



第1面 浅間 A 軽石混土層下面



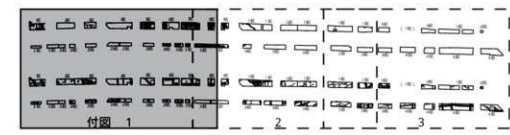
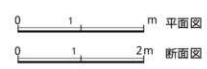
第2面 浅間 B 軽石・B 混土層下面



基本土層

- 層土。
- 褐色土。浅間A軽石 AsA 含む。現代の埋め込み土。
- 粘質灰黄色土。浅間A軽石 AsA 含む。現代の水田耕作土。
- 褐色土。浅間A軽石 AsA を僅かに含む。
- 黄褐色土。浅間A軽石 AsA 含む。一部は浅間A軽石層下以降に転地した埋め込み土。
- 粘質灰黄色土。浅間A軽石 AsA 層下以前の埋め込み土。
- 暗茶褐色土。少量の浅間B軽石 AsB 含む。11ヶ所浅間B混土。
- 暗茶褐色土。少量の浅間B軽石 AsB 含む。1ヶ所浅間B混土。
- 黄灰色粗粒火山灰。浅間B軽石 AsB 二次堆積。1-3mm。下に灰色細粒火山灰。1-10mmの黄褐色軽石。
- 粘質灰黄色土。浅間B軽石 AsB 層下の水田耕作土。
- 粘質灰黄色土。水田耕作土。
- 粘質灰黄色土。上に浅間C軽石 AsC を含む。
- 黄褐色シルト。高純泥堆積物。少量の礫。1-5mmの灰色軽石。埋込に露出された浅間A軽石。黄褐色土を含む。
- 黄褐色シルト。高純泥堆積物。少量の礫。1-5mmの灰色軽石。埋込に露出された浅間A軽石。黄褐色土を含む。

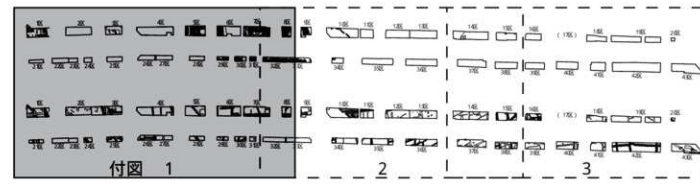
北壁 A-A
灰黄褐色粘質土。少量の浅間A軽石 AsA 含む。
灰褐色粗粒洪水砂。
灰褐色粘質土。洪水シルト。



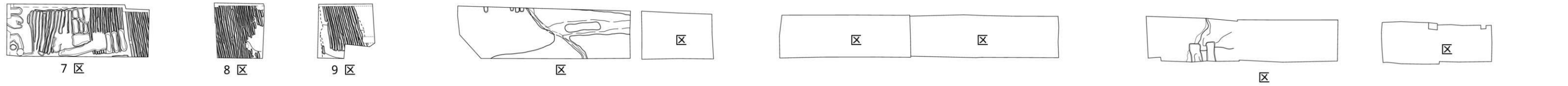
付図 1 岩押 遺跡 第 1・2 面 遺構平・断面図 1

第 1 面 浅間 A 軽石混土層下面

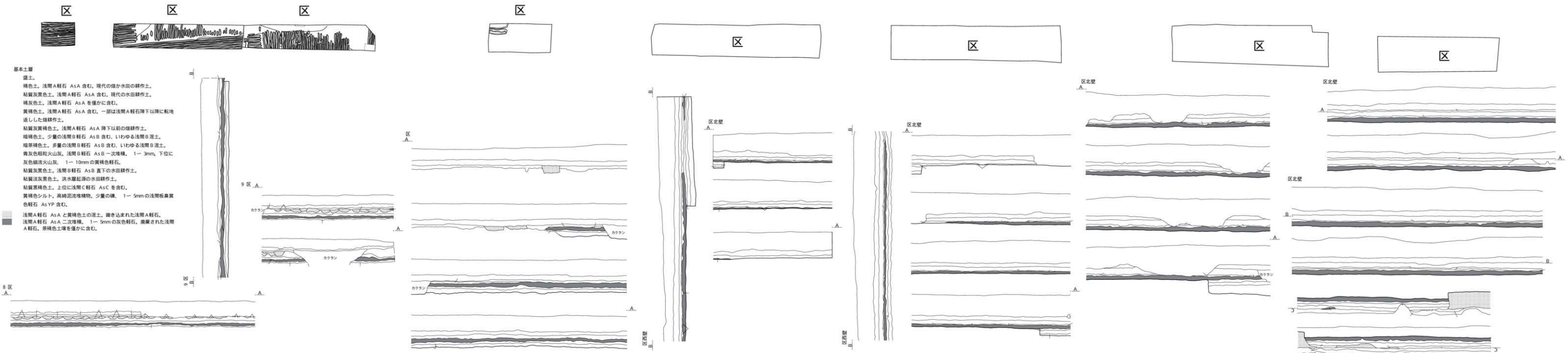
第 2 面 浅間 B 軽石・B 混土層下面



付図 2 岩押 遺跡 第 1・2 面 遺構平・断面図 2

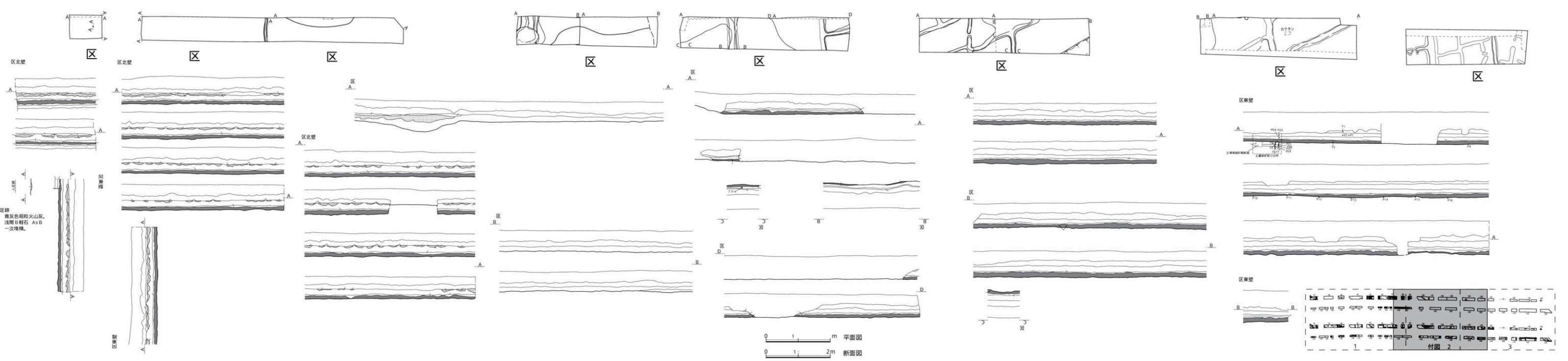


第 1 面 浅間 A 軽石混凝土層下面



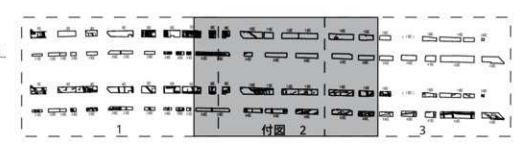
基本土層
 盛土。
 褐色土。浅間A軽石 AsA 含む。現代の畑か水田の耕作土。
 粘質灰黄色土。浅間A軽石 AsA 含む。現代の水田耕作土。
 粘質土。浅間A軽石 AsA を僅かに含む。
 黄褐色土。浅間A軽石 AsA 含む。一部は浅間A軽石降下以降に転地
 近した畑耕作土。
 粘質灰黄褐色土。浅間A軽石 AsA 降下以前の畑耕作土。
 暗褐色土。少量の浅間B軽石 AsB 含む。11ヶ所の浅間B遺土。
 暗茶褐色土。少量の浅間B軽石 AsB 含む。11ヶ所の浅間B遺土。
 黄灰色粗粒火山灰。浅間B軽石 AsB 二次堆積。1-3mm。下位に
 灰色細粒火山灰。1-10mmの黄褐色軽石。
 粘質灰黄色土。浅間B軽石 AsB 基下の水田耕作土。
 粘質灰黄色土。清水層起源の水田耕作土。
 粘質黄褐色土。上位に浅間C軽石 AsC を含む。
 黄褐色シルト。高純度流砂堆積物。少量の礫。1-5mmの浅間B黄
 色軽石 AsYP 含む。
 浅間A軽石 AsA と黄褐色土の混土。露出された浅間A軽石。
 浅間A軽石 AsA 二次堆積。1-5mmの灰色軽石。露出された浅間
 A軽石。黄褐色土を僅かに含む。

第 2 面 浅間 B 軽石・B 混凝土層下面



人皮跡
 黄灰色粗粒火山灰。
 浅間B軽石 AsB
 二次堆積。

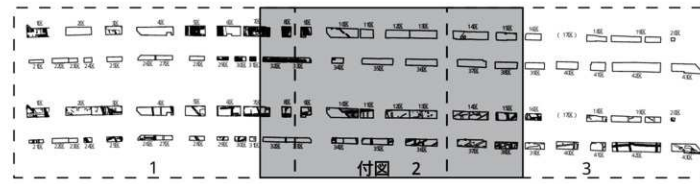
0 1 2 m 平面図
 0 1 2 m 断面図



付図 2 岩押 遺跡 第 1・2 面 遺構平・断面図 2

第 1 面 浅間 A 軽石混土層下面

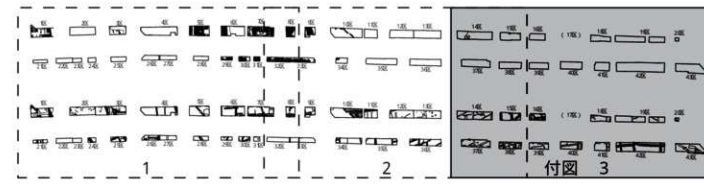
第 2 面 浅間 B 軽石・B 混土層下面



付図 3 岩押 遺跡 第 1・2 面 遺構平・断面図 3

第 1 面 浅間 A 軽石混土層下面

第 2 面 浅間 B 軽石・B 混土層下面



付図 4 岩押 遺跡 第 1・2 面全体図



付図 4 岩押 遺跡 第 1・2 面 全体図

第 1 面 浅間 A 軽石混土層下面

第 2 面 浅間 B 軽石・B 混土層下面